

平成 28 年度 国東半島宇佐地域世界農業遺産調査研究事業 研究成果報告書

農業遺産ロングトレイルを通じた農耕文化や歴史的 ストーリーの掘り起こしとその多面的価値の評価研究

平成 29 年 3 月

九州大学大学院 農学研究院 附属国際農業教育・研究推進センター

研究代表者 野村 久子

Table of Contents

第1部 研究概要.....	3
1. 研究の背景と目的	3
2. 研究内容と達成目標	4
調査研究のスケジュール	5
小課題1：トレイルを通じた、農文化と世界農業遺産システムの関わりストーリーの掘り起こし.....	6
概要（小課題 1-1）	6
概要（小課題 1-2）	6
小課題 1-1. 農文化ストーリーの掘り起こし	7
(1) 問題の所在と本項の目的	7
(2) 聞き取り調査.....	8
(3) フットパス・マップの作成.....	20
小課題 1-2. 外国人旅行者への情報発信	28
(1) 問題の所在と本項の目的	28
(2) 外国人へのヒアリング調査.....	28
(3) SNS 分析	33
(4) まとめと提言	38
小課題2：トレイルの持つ多面的な経済的価値評価.....	40
概要（小課題 2-1）	40
概要（小課題 2-2）	40
(1) 研究目的	41
(2) 研究背景	41
(3) 調査概要	43
(4) 調査結果	45
中間報告会で出された要望・意見に対する回答.....	58
(1) 有効性の検証について	58
(2) 新たなアピールポイントについて	60
(3) コースの整備について	63

第1部 研究概要

1. 研究の背景と目的

2013年に日本トレイル協議会公認のコースとして認定された世界農業遺産を歩く道、国東半島峯道ロングトレイルには世界農業遺産の要素である「文化的景観、伝統的農業、農文化、食、生物多様性」といった多面的な構成要素が数多く存在する。しかし、トレイルの魅力的な情報発信と持続可能な管理方法と活用方法はこれから探っていく段階にあるといえる。そして、トレイルの魅力的な情報発信と持続可能な管理方法といった課題の解決は、世界農業遺産を活用した新たな観光モデル展開の両輪であり同時進行で取り組む必要がある。第一に、世界農業遺産における文化遺産の扱いは極めて補助的・網羅的なものに留まり、文化多様性保全への戦略はほとんどみられない。そこで本研究では、トレイルの情報発信の検討を行い、農文化研究からのアプローチにより、歩くことで見えてくる魅力的な農耕文化やその歴史の内容を掘り起し、効果的な発信を提言する。第二に、長く継承されるためのロングトレイルの管理方法と、そして活用方法を探る必要がある。それには、持続可能なトレイルの整備と補修といった管理には、公的支援とともに補助金に頼らない支援策の検討が重要となる。よって、環境資源経済学のアプローチにより、トレイルの持つ多面的な経済的価値を評価し、その価値に見合ったトレイルの持続可能な管理支援策を探る。

本研究の目的は、「峯道ロングトレイルを歩くことで見えてくる農耕文化と歴史的ストーリーの掘り起こしを行うことで農文化の多様で魅力的なコンテンツを探ることと、及びトレイルの多面的価値を経済的に評価し、持続可能な管理方法と活用方法を探ること」である。

具体的には、農文化研究者が、国東半島宇佐地域にしかみられない独特な農文化遺産をトレイルを歩いて掘り起こすことで、実際に来る人の立場となって魅力な内容を掘り起こす。特に、世界農業遺産は、中国、韓国といった東アジアで認定が増えている。また、アジアの入り口である九州は今後もインバウンドの観光客が増えると考えられる。このことから海外からの旅行者の嗜好性を考慮しつつ、国東半島宇佐地域の魅力を発信する提言を行うことは、地域の観光戦略にも資する。

また、トレイルの持つ多面的価値の経済的評価により一般の人々がトレイルに認めている価値を明らかにすることで、効果的な保全対策の策定に資することができる。それによりトレイルの持続可能な支援策を提言するとともに、トレイルを通じた観光促進と農村振興に向けた効果的な支援施策を提言する。

2. 研究内容と達成目標

世界農業遺産の認定地域では、近代化の中で失われつつある伝統的な農法が継承されてきたことにより、文化的景観、伝統的農業、農文化、土地固有の食、生物多様性が守られてきた。また、伝統的のみでなく循環利用といった持続可能な土地利用システムと一体的な「農文化システム」が存在し、それらが農の営みによって次世代へ継承される仕組みがある。

一方で、農家の高齢化や農家数の減少に伴い、国東半島の集落数自体が今後すくなくなり、農業遺産を維持・継承する担い手が減少している。世界農業遺産で農文化の保全、あるいは生物多様性の保全を謳うならば、農文化や生物多様性の源になっている農の営みへの支援も同時に考えねばならない。そこで、本研究では「農文化システム」の中に息づいているロングトレイルを歩き、魅力的な農文化と農業の関わりを知り体験するというツーリズムを展開することで、地域振興へつながる新たな観光モデルを提唱し、そのための基礎研究を行う。

国東半島峯道ロングトレイルには世界農業遺産の要素である「文化的景観、伝統的農法、農文化、食、生物多様性」といった多面的な構成要素が数多く存在する。しかし、トレイルの魅力的な情報発信と持続可能な管理方法やはこれから探っていく段階にあるといえる。そして、これらの課題は、新たな観光モデル展開の両輪であり同時進行で取り組む必要がある。

そこでまず第1課題として、農文化研究者が、国東半島宇佐地域にしかみられない独特な農文化遺産をトレイルを歩いて掘り起こすことで、来訪する者の立場となって魅力的な内容を掘り起こす。

また、世界農業遺産は、特に中国、韓国といった東アジアで認定が増えている。また、アジアの入り口である九州は今後もインバウンドの観光客が増えると考えられる。このことから海外からの旅行者の嗜好性を考慮しつつ、国東半島宇佐地域の魅力を発信する提言を行うことは、地域の観光戦略にも資する。

次に、第2課題は、トレイルの持つ多面的価値の経済的評価であるが、この研究により一般の人々がトレイルに認めている価値を明らかにすることで、効果的な保全対策の策定に資することができる。まず、第2課題(1)として、トレイルの持つ「文化的景観、伝統的農業、農文化、食、生物多様性」といった多様な価値を経済的に評価する。

また、第2課題(2)として、世界農業遺産の要素である生物多様性や農文化の保全活動支援として、「世界農業遺産 生物多様性・農文化保全基金」(仮想)を設定し、世界遺産認定地域を生息地とする生物多様性保全活動や農伝統・農文化保全活動等に対する非補助金型の支援策の検討を行う。これは、費用の一部を基金から支出することで、

行政と市民が共同して保全活動を支援する新しい形での、市民参加型保全活動に資する。

そして、最終的には、トレイルの持続可能な支援策を提言するとともに、トレイルを通じた観光促進と農村振興に向けた効果的な支援施策を提言する。

調査研究のスケジュール

調査研究計画を以下に示す。9月ロングトレイルの農文化ならびにその歴史の掘り起こしのためにガイドとともにトレイルを歩く。(これを必要に応じて2回あるいは3回行う。)

10月 旭日区のイベントに合わせてアンケート調査を行う。(10月下旬の日曜日)

11月 国東町富来のイベントに合わせてアンケート調査(日程の要確認)

12月 中間報告

3月 報告書提出

	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
第1課題 農文化掘り 起こし	トレイル 歩き	トレイル 歩き	トレイル歩 き	資料分析	資料分析	分析結 果まとめ	報告 論文
第2課題 (1)多面的価 値評価		アンケー ト調査 (地区1)	アンケー ト調査 (地区2)	データ分 析	データ分 析	分析結 果まとめ	報告 論文
(2)生物多様 性基金設置 の検討				データ分 析	データ分 析	分析結 果まとめ	報告 論文

小課題 1：トレイルを通じた、農文化と世界農業遺産システムの関わりストーリーの掘り起こし

阿蘇たにびと博物館 梶原宏之・陳怡靜

概要（小課題 1-1）

小課題 1-1 では、国東半島・宇佐地域世界農業遺産における農文化ストーリーを掘り起こすことを目的として調査および検討を行なった。調査対象地域を国東市国東町綱井地区に設定し、綱井地区のフィールドワークを通して環境と生業の関わりを調査した結果、かつて「嫁にやるとも綱井にやるな」と唄われた寒村が、新たな溜池を整備していくなかで「嫁にやるなら綱井へおいで」と言えるまで収量を上げられたことが分かった。そこで実際に綱井へ嫁に来た女性たちがどんな思いでいたかを探るための婚姻に関する民俗学調査を行ない、それを基に記憶のフットパス・マップを制作した。その結果〈歴史的事実〉のみならず〈感情移入的挿話〉が重要な要素となろうことが指摘された。

概要（小課題 1-2）

小課題 1-2 では、国東半島・宇佐地域世界農業遺産を訪れる外国人訪問客らへ対し、どんな情報を発信できるか検討するため2つの調査を行なった。一つは、すでに開かれているウォーキングイベントや宿泊施設を実際に利用して、参加した外国人たちから問題点等をヒアリングした。もう一つは、写真 SNS の代表的アプリであるインスタグラム上へアップロードされている国東半島に関する情報を収集し、それらを世界農業遺産の5つの構成要素に沿って分析することで、外国人旅行者たちの目に興味深く映っている項目、また逆に映っていない項目について検討を行なった。その結果、特に農文化に関する風景が注目されていることが分かり、また伝統知識については気づかれておらず、農作物や生物多様性についても改善の余地が充分あることが指摘された。

小課題 1-1. 農文化ストーリーの掘り起こし

(1) 問題の所在と本項の目的

小課題 1-1 の目的は国東半島・宇佐地域世界農業遺産における農文化ストーリーを掘り起こし、提案することである。

本項に取り組む理由は2つある。一つは、世界農業遺産の5つの構成要素のうちの一つの柱である「農文化」にスポットを当てるためである。そしてもう一つは、点々と点在する文化項目をつなげて一連のストーリー制作を試みるためである。

前者の、農文化にスポットを当てるのは、世界農業遺産の他の構成要素に比較して、農文化の扱いが少ないと感じるためである。他の構成要素、特に生物多様性については具体的な希少種数や、伝統的な農法を守ることがどのようにそれら希少種を守ることにつながるのかが努力して説かれるのに対し、文化的多様性については、こうした祭りや芸能もありますといった紹介にとどまり、伝統的な農法を守ることがどうそれら農文化を守ることにつながるのかを説得する努力が、自然科学分野のそれに比して少ないと感じられる。そこで実際に農文化にスポットを当てて考察すれば、どのような情報発信が可能となり得るかについて検討する。

後者の、一連のストーリー化を目指すのは、これまでの農文化の記述や記載が個々にバラバラであり、総体的に地域文化を描き出していないと感じるからである。総体として地域を描くためには、なにがどうしてどうなったかという一連のストーリーを描くことが有効である。特に文化の記述にあたっては、単なる〈歴史的記述〉のみならず、住民の〈感情移入的挿話〉が重要となる。

まず、今回の調査対象地域として国東町綱井地域を選んだ。その理由は、綱井を含めた旭日地区全体において、すでに案内パンフレットの作成やウォーキングイベントが盛んに行なわれていることがまずあげられる。今回は、これまで綱井地区の皆さんが取り組んでこられた活動をベースに、そこからどういう別の視点や展開が可能となるかを検討し、提案することを目的とする。

調査研究の手順としては次の通りとなる。①まず現地でフィールドワークを行ない、いかなる自然環境に人々が暮らしているかを実感として把握する。②ついで参与観察法による民俗学的聞き書き調査を行ない、住民たちの記憶を地図上に落とし込みながら、ストーリーのテーマとなりそうな話題を見つけ出す。③そして見つかったテーマに肉付けして追調査を行ない、フットパス・マップを制作する。これら調査とマップの制作には数年をかけることが通例であるが、今回は限られた時間のなかで一つ可能性を示したい。

(2) 聞き書き調査

フットパス・マップ制作の前提作業として、民俗学的な聞き書き調査を行なう。通例、調査地に入る前から研究課題が明確な社会学などとは違い、民俗学は調査地に入る前にはまだ課題がはっきりしていない。前者を課題解決型科学、後者を課題発見型科学とも呼ぶが、いずれにせよ実際のフィールドの暮らしのなかから五感を通して課題を発見するのが参与観察法である。

その観察法に基づき、得られた聞き書きデータを以下に記述する。普通、完成された民俗誌は体系的に網羅されるものだが、ここでの記述は任意な方向へ調査項目が飛んでいる。それは、ウォーキングをしながら話者が目に入ったものについて口述を始めたり、イベントの進行により会話が突然止まったりしたためである。しかしこれら聞き書き調査をしながら、どう課題を発見していけるかをうかがうことができるだろう。なお、[] 内は筆者による補註である。

綱井 国東市が合併したのは 10 年前 [2006 年 3 月 31 日]。それまで 4 町 1 村だった。4 町は国見、国東、武蔵、安岐、1 村は姫島。旭日は旧国東町のうちの一地域。旭日には 4 区あり、県道山側が**上次郎丸** (かみじろうまる)、県道南側が**下次郎丸** (しもじろうまる)、重綱川の北側が**綱井** (ここが最も大きい)、重綱川の南側が**重藤** (しげふじ)。これら 4 区を合わせて旭日地区という。綱井と重藤の間を流れる重綱川はこの両区域の名前から 1 文字ずつとってつけられたもの。

高雄池ができる前まで綱井はとても貧乏な集落だった。役場とか JA とか兼業が多いが、綱井の 95% くらいは農家だ。集落の規模は 110~120 戸でずっと推移している。そのうち 5~6 軒が商売のみの家。昔は農業が生業の基本だったし、農業がもうかったのでたとえ農地を借りてでも、また他人の小作に入っても農業をしていたが、今では状況はすっかり変わった。

綱井は昔、綱井村といった。かつては寒村だったが、米がとれるようになって明治以降は公共施設もいろいろ綱井にできた。学校も農協も、村役場も郵便局も綱井にあった。昔軽便鉄道が走っていたとき、綱井にその駅もあった [かつての大分交通国東線。明治 44 年(1911)杵築~富来までの地計画がベース。大正 3 年(1914)国東鉄道株式会社設立、大正 11 年(1922)開業。しかし富来まで延長しようとしていた最中に水害にあい、昭和 41 年(1966)廃止]。いまの 213 号線はかつて鉄道が通っていた跡である。この辺りでは「三十六年災」といって、昭和 36 年(1961)に起こった水害のことを記憶している人が多い。それがきっかけで鉄道も被害を受けて、バスに切り替わった。安岐町では上流にダムもできた。しかしそれ以降はこの辺りでは大きな水害はない。

生業 綱井は川がない。谷が狭いから。だから溜池をつくった。次郎丸川は川に見えるが立派な川ではない。旭日小学校からみる南の山並みは、いまの旭日小の子どもらはワニ山と呼んでいる。ワニが寝そべっているように見えるからで、旭日小の卒業生が名付



けたらしい [写真参照。旭日の卒業生がワニ山と付けたと指す山下純生綱井区副区長のお孫さん]。昔は山にはタキモントリに出かけていた。出かけるのは家族全員で3月頃、春休み。竹で束ねる。昔はシュラ（そり）に乗って牛で山から引っ張り出していた。シットウは夏だけ。冬場にムシロウチをやる。夜なべ仕事だ。タキモンをくべてや

っていた。一家のうち、母の仕事は子育てと農業、シットウのムシロ織りは母の仕事だった。イチビを裂いてヨリというシットウの縦糸をつくる。父の仕事はタキモン運びなど。

1年の流れは、田が終わって（10月）、麦播き（11月）、翌年4月末～5月がムギシノ。麦を刈らないと次の田が植えられない。8月がシットウジノ。この辺りでは収穫と収納をシノという。穀物を入れる場所はシノヤ。シットウを浜に干すときの小屋はハマコヤ（浜小屋）と呼んでいた。夏場は朝から晩までハマコヤにいた。朝3時頃からモトヨセをする。これはシットウのモトを寄せるからそう呼ばれる。ガゴウと呼ぶ歯が長い熊手でモトヨセしていた。農作業用の牛はどこの家も飼っていて、彼らを扱うときの呼び声もあった。「ドウドウ」が止まれ、「セイ」「サシ」が左とか右という意味だったと思う。雄牛はコッテ、雌牛はメンと呼んでいた。昭和40年くらいまでは牛を引いていた。「牛は後ろから、馬は前から」という言葉を聞いたことがある。ある農家では親牛が3頭いた。すべてメンである。子牛が生まれるときはなぜか夜が多かった。死ぬときは海が引き潮のときともいわれた。シットウを浜へ運ぶのも牛を使っていた。牛でリヤカーを引いてシットウを運んだ。昔この辺りはキツネやタヌキもいて、夜道を浜へ運ぶときに牛がそれに気がついて怖がり、一步も前に進まなくなることがあった。

盆踊り 綱井に伝わる盆踊りの唄 [口説] がある。そこに「嫁にやるとも綱井にやるな」という歌詞がある [参考文献参照]。これはかつて綱井は土地はあっても水がなく、米がとれないから金がない。大変苦勞した土地なので、娘を嫁にやると苦勞するという意

味である。しかしその後、庄屋の萱島信任（かやじま・のぶとう）氏が高雄池をつくり、水路でつないで田に水をやったことで（1778～1783年頃）8斗しか年貢米を納められなかった地域が300石にまで増えた。それで今ではむしろ「嫁に行くなら綱井においで」とも言うようになった（昭和30年代の後半の話）。

昔はクドキ〔口説。盆踊りで唄われる歌詞、およびそれを唄う音頭取りもクドキと呼ばれる〕も上手い人がいた。クドキはたいてい男である。踊りの人たちは太鼓を持って集落を回り、特に初盆の家に必ず来て庭で踊っていた。だからもしその年に初盆の家がたくさんあると全部回るのが大変だった。外庭のことはこの辺りではツボといい、ある家では父親が「ツボにはニワを作るな」と言っていた。ニワを作るとは池を掘ったり園芸樹を植えて庭園をあつらえることで、そうすると自由に使える空間が狭くなるから、農作業や盆踊りの際にも不便だという趣旨である。

溜池 旭日地区全体の中に溜池は21ある。南北を通る県道が明治28年頃できた。電柱が明治29年で県道のあと。サコイケ（迫池）も28年にできている。だから迫池は県道敷設にともなってできた新しい溜池ではないか。溜池はたくさんあるができたのは各々違う。迫池は、海から内陸に入り込んでいた入江を、県道が断ち切ってできた池と思われる。断ち切られたスペースを、せっかくならばとつくった池で、必要に迫られてつくられたものではないだろう。サコはこの辺りでは谷を意味する。ヒラオ（平尾池）は迫よりももっと昔にできている。コーシン（荒神池）は今の旭日小学校ができたあとはもう実質的に使っていない。ミサゴ（美迫）はミサゴという迫にできたから美迫池。江戸中期にはすでにあつた。江戸末期に拡張したとも伝わる。この池が綱井全体の池に水を供給するようになっている。小さい池では充分でないので、足りないときには美迫から、それでも足りないときにはタカオ（高雄池）から持ってくる。高雄池はどの田にも直接水を入れていない。上流の高雄からフルイケ（古池）へ、古池から美迫へという流れではなく、高雄は古池への供給というよりはもっと下の水田のためのものだろう。水が少ないとき、古池の水は近所の人たちがみな使ってしまうので、それ以外の人々の田へも水を供給するために高雄ができたと考える。この辺りは海岸から4kmほどしか離れていない。雨が降ってもすぐ海へ流れ出してしまうので、川から水を取り込んでまた川へ出したり、池から水を取ったりなど、水をなるべく海へ逃さず有効利用するための工夫を施している。

昭和30年代だったか、大人たちが雨乞いの儀式のようなことをしていたのを見たことがある。場所は海の近くの天神さん辺りだったろうか、なにしろ子どもだったので詳しいことはよく分からない。しかしそれ以後は見ることがない。

圃場整備 戦後、耕地整理を行なった。このとき、組によっては反対もあった。綱井の

農民たちは1軒あたり平均で5反くらいしか農地を持っていなかった。美迫池の近くに「県営圃場整備事業竣工記念碑」が建っている。工事期間は昭和62年～平成7年。20町歩あまりを整備し「地形的に傾斜地多く千枚田の様相を呈し」と碑に書かれている。



畑に、海漁で使う網を掛けている人がいるのは、ヒヨドリが山の実がなくなると飛んできて作物がやられてしまうので、そのための防止策だろう [写真参照。2016年10月20日梶原撮影]。ヒヨドリは正月すぎに里に下りてきて、キャベツや白菜、ブロッコリーまでやられてしまう。最初はチョウが卵を産まないように掛けていたが(キャベツに青虫がつく)、今ではヒヨドリの被害も無視できなくなった。網は昔、海漁に使っていたものではないか [海と陸を繋ぐ接点の一]。

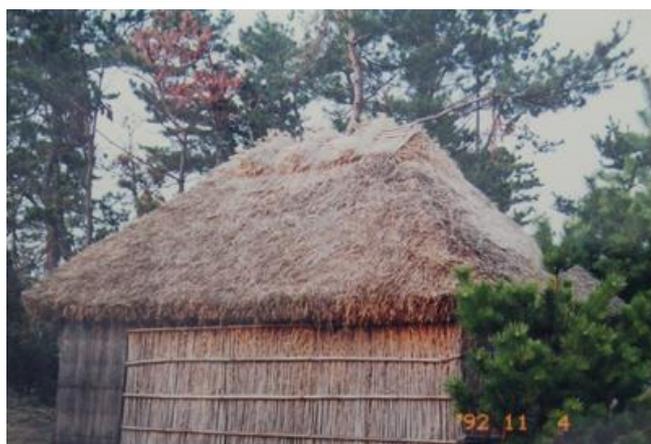
ミカン農家 若山地区は手掘り開墾してできた新しい地区。戦後すぐ、昭和22～23年頃できた [詳細不明、追調査必要]。昔から3軒ほどミカン農家があった。ギオン(祇園山)の斜面も昔はミカン畑が広がっていた。オレンジロード [昭和45年(1971)着工、昭和60年(1985)全線開通] はパイロット事業の再整備事業の最盛期頃にできた [国営パイロット事業。1960年代～1970年代前半にかけて実施された大規模な農地開発事業。特に国東では七島藪に代わりミカン畑を国や県の多額の補助金を注ぎ込み造成したが、全国的な供給過剰により価格が暴落し衰退した]。パイロットのことは高雄池の改修碑に詳しく書いてあると思う。今ここにはミカン農家は一軒もない。家庭用に少しだけつくっているくらい。当初の目的であるオレンジを運び出す必要もないが、杵築とか昔からつくっている所はまだやっていると思う。次郎丸のほうは愛媛から来た人たちが入植してミカン栽培を始めた。愛媛よりこちらのほうが栽培しやすかったようだ。外から来たオヤマダさんもパイロット事業で来たのだろうか、たぶんこちらの親戚を頼って来たのかもしれない。シットウはみなつくっていたが、ミカンは全員ではなく、点々とやっている家があったという程度。2～3割ほどだろうか、半分もなかった。和者の娘が幼稚園の頃の話だから、30年くらい前だろうか。ミカンの苗は四国から移住してきた人が持ってきたのかもしれない。ミカンチギリの手伝いにはよく行っていた。ミカンはニドチギリ(二度千切)する。最初に長めに斜めに切ったあと、次に短く形を整えた。現金収入としては、かつてはみなシットウ、ついでミカン、そしてキウイが入ってきた。キウイは昭和50～60年頃、平成になる前までの話。そして今はカボスやオリーブ(国

見が多い)、ヒマワリ（次郎丸が多い）など多様化している。ヒマワリは油とお茶にもしている。休耕田の利用である。これらは特に山あいの集落でみられる。タバコもかつてつくっていた。シットウのあとミカンが入ってきたのとほぼ同じ頃に並列していたと記憶する。

シットウ シットウ（七島藺）はほとんどの家がつくっていた。栽培して、畳表（たたみおもて）にまでして出荷する。栽培地は明治になってからずっと綱井が中心だった。シットウもミカンも現金収入だが、シットウのほうが歴史が早い。ミカンがそのあと。シットウはジュルい所〔湿地〕によく生え、質もより良い。ジュルい所とは、水が湧いている所ではなく、池や川から入ってきた水がなかなか引かない場所をいう。

シットウはイチワ（1 輪）、ニワと数える。それを編んでイチマイ、ニマイとして、10 枚でイッコク（1 束）と数える。シットウを割くことはワクといい、編むことはウツと言っていた。ワクのは家族全員、刈ったり売るのは父親の仕事、ウツのは母親の仕事だった。シットウのナカガイ（仲買）がいて、彼と交渉してシットウを売る。値段が高い時期があるので、そこを狙うことが父親に期待された。低く売ってしまうと母親と喧嘩になることもあったが、しかし各家庭で現金収入が必要なタイミングは異なるので、たとえ値段が低い時期でも現金が必要ならば売らざるを得ない。シットウを売って得た現金は、必要なものを買ったり、子どもの学費やお小遣いにもなった。子どもたちはそれでお菓子を買ったり釣りをしたりした。釣る場所は川辺で釣ったり池で釣ったり。池はコイ、フナ、ドンコがいて、海の近くは汽水域なのでウナギやシジミもいた。

シットウを海辺に干すのにみなどこの家も浜小屋をかけていた。これはシットウ用であるが、海漁にも使っていた。子どもたちはここで、親が仕事をしている間よく遊んだ。小屋は竹で柱を組み、屋根は茅葺きだった [写真参照。写真はどちらも山下昇氏所蔵。カラー撮影の小屋は火事で焼失してしまった]。雨が降ってくると家族総出でシットウを慌てて小屋へ取り込んだ。



海漁師 昭和 40 年くらいまでは海漁師がいた。ただし漁師専門で

はなく、農業との兼業である。海岸から魚の群れを見張っていて、今だ船を出せ！などと指示を出していた。2艘の船で出かけていき、魚群を囲い込んで捕まえる。地引網もしていた。収穫した魚は、大人たちは働きに応じてカゴにいくつというように山分けし、子どもたちは網からこぼれたおこぼれを拾って貰っていた。獲れる魚はイワシやイリコ（小さいイワシ）で、茹でて干してニボシ（煮干）にした。干すときにハエがすごかったのを覚えている。美味しかったが、食べ過ぎると必ず腹を壊した。

潮の流れが変わったのか、昔に比べるとこの辺りも砂が少なくなった。いまテトラポットがある辺りまで昔は浜だった。昔マツを植えて、それもあり狭くなった。しかしそのマツも松食い虫ですべてやられてしまった。

砂鉄掘り 戦後、昭和30年代くらいまでスナホリさんという砂鉄掘りを仕事にする人たちがいた。たしかチョウキ・クドウさん〔クドウは姓ではなく下の名〕という次郎丸の人が1人と、あともう1人いたが名前は分からない。浜辺は夏季はシットウに使うのでそれ以外の時季に掘っていた。クロズナトリとかスナトリといていた。この辺りの浜辺は珍しいことに個人所有であり、どこの浜辺が誰の家のものか決まっている。だからスナホリさんたちはその人たちに使用料を払って掘っていたと思う。浜辺の所有権はたぶん明治の頭頃にハマワリ（浜割り）して登記したらしい。1軒あたりの平均の広さは7~8aくらいだろうか、10aはなかった。

旭日小学校 私たちもここの卒業生で、昭和30年の入学組〔写真参照。山下昇氏所蔵〕。当時は校庭の隅にイモが植わっていた。いまは木が植えてある辺り。当時は食べ物がないから。学校でイモアメを作っていたのを覚えている。ナンバ・キヨ子さんという、給食専任のようなおばちゃんがいて作ってくれたが、子どもの親たちも当番で手伝いに出ていた。燃料がないのでみな薪も2~3本ずつ家から持ってきていた。野菜とかも持ってきていたと思う。今でいえば地産地消ではあるが、とにかく栄養が足りなかった。自分たちの時代が脱脂粉乳がちょうど出だしの頃。そのあと味噌汁が出だして、昭和36年くらいに完全給食になった。田舎にしては早かったと思う。お正月の頃は、弁当箱に餅を入れて持ってきていた人もいた。それは米がないからではなく、親御さんが弁当を作るのが面倒だったから



ではないだろうか。正月頃はシットウ（七島藺）のムシロを打っていた時期なので、忙しかったからだろう。

正月があけて3学期の始業

式には、学校でミカンがもらえるので子どもたちはとても楽しみにしていた。当時のミカン農家が無償で旭日小の子どもたちへ配ってくれていたが、当時は児童数も多かったから大変だったと思う。ミカン農家でない子たちはミカンがもらえるのが嬉しかったし、とても楽しみにしていた。だから子どもたちはこの始業式を「ミカン式」と呼んでいた。もらったミカンはその場で食べず、持ち帰っていた。当時はそうしたものは必ず家に持ち帰るもので、もし途中で食べたりしたらトーチャン、カーチャンに怒られただろう。

他に学校行事の記憶としては、男の子は寒稽古をしていたのを覚えている（1～6年生）。ヒノヨージン（火の用心）もしていた。冬休みに、拍子木を持って「マッチ一本火事の元」とよく練り歩いた。

墓所 東から小学校へ行く道は入口が墓所になっている。ここでガキ大将がある家の墓を蹴り倒して、自分たちはなにもやってないのに先生に全員怒られてひどい目にあった記憶がある。この辺りは昔はみな土葬だったが、昭和30年代、だいたい32～33年頃にはなくなって火葬になったのでないか。墓所には夜夏場になるとリンが上がって、それが火の玉のように見えたのでとても怖かった。

前明神 あまり子どもの頃の記憶がない。小学校よりこっちはあまり来なかったから。そもそも道路もなかった。

美迫池 小学校2年生のとき、同級生がここで亡くなった。だから近づかないようにしていた。夏休みの間で、男の子。滑って上がれなかったようだ。2人落ちて1人は助かったかもしれないがよく分からない。亡くなったのを知らされたのは夏休みが終わってから。人生で初めて他人の死を意識した経験であり、初めて葬式にも出たので、記憶に残っている。男の子は学校でも一番のいじめっ子でやんちゃな子だった。

遊び 男の子はよく竹で作ったスギデッポウ（杉鉄砲）で遊んでいた。大きい竹に小さい竹を入れて撃ち合う戦争ごっこである。女の子はジュズダマ（数珠玉）で、草の実を河原から取ってきて自分で作っていた。男の子も女の子も野の中でよく遊んだ。バカと呼ぶ種がよく服にひっついた。「バカにしか付かん」などと笑っていた。ガンガラハ[サンキライ]の葉はよく餅を挟んで蒸すのに使っていた。ガンガラの名前の由来は分からないが、ガラガラ音がするからだろうか。蒸すときは新しい葉は柔らかいため餅にひっつくので葉を必ずひっくり返して蒸していた。ウツメという、鳥を捕まえるワナもよく作っていた。作り方は上級生たちから教わった。山へ遊びに行くのに縄や肥後の守を持って行き、それで作った。山は自分の家の近くの山。今は駄目だが（大分県の県鳥でもある）昔はメジロもよく捕まえていた。モチノキの皮をはいでトリモチを作り、それを梅の枝にかけておく。ツバキの花を梅の新芽に巻きつけると、メジロがそのツバキの蜜を吸いに飛んで来る。メジロが枝に捕まるとそれから動けなくなり、飛ぼうとしても

そのまま上下ひっくり返るのはおかしかったが、可哀想だからすぐに捕獲してあげねばならない。捕まえたら選別して家で飼っていた。国東半島のメジロは声がいいという話を聞くことがある。上手な人はメジロの鳴き真似をして呼び寄せていた。こうして山に行くのはたいてい男の子だが、なかには男勝りの女の子がいてニイチャンについて来ることもあった。あと山菜もよく採っていて、ツワもとれるシタラノメもとれる。シイタケも自家用で、山で栽培していた。ローバイ（蠟梅）の花は香りがよい。

男の子たちの一年は、夏はシットウの手伝いに牛の世話、冬は田んぼで野球。とはいえろくなボールもないので適当に三角ベース。春はワカサギ釣り。コイもいるにはいるけど釣れない。毎年でないが稲刈りあとにイケサライをすることでできる魚取り。子どもの頃はとにかく遊びたいし、家にいると「手伝わんか」と怒られたのでよく魚釣りに出かけた。釣り道具は家で手伝をしたときにもらえるお小遣いを貯めて買い、竿は自分で山から見つけてくる。小遣いをくれるのは父で、昔はどこの家もたいてい父が財布の管理をしていた。シットウの売買など出納管理も父親の仕事だった。祇園山はスキー〔草スキーのようなソリ〕もして遊んだ。しかしスピードが出すぎると怖かったので、よく横のミカン畑へ転がりこんで逃げた。農地へ入り込むと大人たちに怒られたが、しかし子どもだから怒られるよりは面白いほうが優先だった。男は度胸、肝が太いのが良いとされていた。ただし女の子はそうした遊びに加わることはなかった。男の子はへびを振り回したり、麦畑に入ってクロンボ（黒ずんだ麦の穂）をちぎっては口に当ててヒゲだと遊んで怒られたり、菜種畑の中に入って怒られたり、とにかくよく怒られた。怒られるのは主に男の人から。女の子はクロンボの芯で草笛を鳴らして遊んだりはしていた。シットウの畑でも、パラチオン〔ポリドールともいう殺虫剤〕を撒いたあと、赤い旗が立てられて近づいてはいけないのに近づいて怒られたりした。

結婚 この辺りの結婚相手は、旧旭日町内でたいてい見つけていた。旭日町と、それから安岐〔旧安岐町。2006年に国東市に合併。西武蔵から小原（おわら）手永まで〕から国見町〔同じく2006年国東市に合併〕辺りで結婚していた。武蔵、国東町、それに高田〔豊後高田〕も何人かいた。

恋愛結婚よりもかつては見合いが多かった。見合いで初めて相手を知ることも多く、3〜4回見合いをして、コウサイ（交際）を何ヶ月かしてから結婚する人が多かったと思う。結婚適齢期は20歳以降、20代のうちが多かった。20代後半になって、しかし食べていけるかどうか自信がない息子に「一人口は食えんども、二人口なら食える」と説教する親もいた。結婚のことはシュウギ（祝儀）といていた。地域に世話役のおばちゃんがいる、その人がナコウド（仲人）になることもある。恋愛結婚の場合でも仲人は必ず立てる。タテナコウドといって、本家や親類、あるいは勤め先の上司（近所に住む）

など、形式上好ましい仲人をお願いする。家の経済事情により例外はあるが、仲人は聳側と嫁側の双方に立てる。仲人は必ず夫婦で、独身や寡婦の者は立てられなかった。互いに結婚の意思が固まるとユイノウ（結納）をする。聳側が嫁の家へ行き挨拶する。家にもよるが、その後1ヶ月くらいしてから祝儀を挙げる。

親族や近隣を全員呼ぶととても多いので、最初にまず近しい親族や地区のリンポハン（隣保班）全員（各戸から代表1人）を招いて正式な結婚式をあげ、次いで家に帰り近所の人たちや友人たちに対して披露宴を開いた。呼ぶ者が多いため披露宴を3日間くらいやっていた家も少なくない。いまのヴィラホテルはむかし望海苑（ぼうかいえん）という宿泊宴会施設で、そこで式を挙げた者もいる。もっと昔は聳の家で結婚式は全て行なっていたが、やがてそうしたホテルや公民館などで式を挙げるようになった。こうした、互いが自分の家から出て外で挙げる式をデアイといった[写真参照。写真は国東町閉村記念誌より]。公民館結婚式が流行ったのは簡素化の狙いもあったが、たとえば武蔵公民館で結婚した者のなかには、神主もおらず、祝詞や三々九度の口上が録音テープレコーダーの再生だった者もいる。しかしもちろん結婚式など生まれて初めてだったから

「こういうものか」くらいで不思議には思わなかったと、今では笑い話になっている。

嫁が自分の実家をいよいよ出るときは、家の仏壇に挨拶をしてから出る。旭日地区へ嫁に来るのに不思議だと思った記憶として、聳側の使いの者がお札を持ってきて、それを肌身離さず持っておけと言われたことである。自分の地区にはない風習だ



だったので不思議に思ったが、これをコーシンヨケ[荒神あるいは庚申除け。荒神は普通コージンと発音するが、綱井では荒神池をコーシンと発音していることから荒神と思われる]と呼んでいた。それを嫁に来てから寝ている部屋の天井や屋根裏に貼れとか、肌着のタンスに入れておけと言われたのはよく覚えている。家の仏壇に挨拶をすませると、嫁はブンキンタカシマ（文金高島田）、嫁の母は紋付でムラマワリと称して近所や神社に挨拶し（これをヨメクバリともいう）、車に乗って聳の家へ向かう。ここでも面白い記憶があり、車に乗るときに長靴を履かされた嫁がいる。出してくれた車が土方用のものであったため、足元が汚れるからと履かされたが、眺めてみるとたいそう妙な格好であった。結婚式のための化粧はオヨメサンツクリといって、朝4時頃から美容師さ

んが来て髪をセットしてくれたがこれも大変だった。カツラアワセがあるからと言われたが、見るとカツラは1種類しかなく、カツラを合わせるのではなくカツラに自分を合わせねばならず、地毛をぎゅうぎゅう引っ張られて痛くて痛くてたまらなかった。そうした格好で早朝から深夜遅くまで立ち回らねばならないため、お嫁さんは本当に大変だった。家を出るときに何かもう一つ、何かしら儀式めいたものがあったようにも思うが、思い出せない。

祝儀ではたくさんお酒を飲むので、ふだん近所の大人しいおじさんが酒を飲んで行動が大胆になり、酔って聳が怒られたりして、この人はこんな人だったのかと驚くこともあった。家で結婚式をあげるときは、夜いつまでも近所のおじちゃんたちが飲んで大変だった（そろそろお開きにしましょうなどと促す風習はこの辺りでは特になかった）。そのため聳も酔いつぶれてしまい、そのことで翌日記念すべき第1回目の夫婦喧嘩が始まるなど、笑い話には事欠かない。

お喜び 結婚式が終わって翌朝、新嫁さんがお茶を近所の女性たちへ配る風習がある。これをオヨロコビという。結婚式のときに着た着物とは違う、自分が実家から持ってきた自身の着物を着る。近所の家から1軒につき代表1人ずつ、女性ばかりが集まる。いわば新しく地区へ来たお嫁さんの顔見せであり、地区の女性社会デビューである。ただし嫁を皆で吟味するような厳しいものではなく、和気藹々とした楽しい集まりだった。そこで嫁からお茶が振舞われ、1時間ほど談笑して散会となる。

新婚旅行 オヨロコビが終われば、晴れて新婚旅行に出かけることができる。当時は新婚旅行の行き先としては宮崎や長崎が人気だった。「オボウシかぶってピンクのスーツケース持って」というのが典型的な新婚旅行スタイルで、みんなこの格好をしていたし、それが憧れだった。新婚旅行へ出かける服装は、男は必ずスーツ、女は必ずワンピースで、このワンピースは結婚式の最後に着て披露したもの。杵築駅や佐伯駅に若者たちが見送りに集まり、よくアーチをつくってくぐらせたり、万歳の胴上げもした。このとき胴上げでわざと落として、怪我をしてしまい、新婚旅行に行けなくなってしまった可哀想な夫婦もいた。こんないたずらをするのは若同僚の男性だけである。

部屋割 この辺りの農家はどこも典型的な田の字型の民家作りで、まず家に入ったところがドマ（土間）、最初の手前の部屋がヒロマ（広間）、その奥がザシキ（座敷）で突き当たりに神棚と仏壇が左右に並ぶ。ついで土間を進んだ部屋がナイショ、その奥がナンド（納戸）と呼ばれる薄暗い部屋になる。土間は台所仕事や夜なべ仕事に使うので、ムシロバタが敷いてあり、水甕が置いてあり、一番奥にクドとイド（井戸）がある。それから母屋と少し離れた敷地内にシノヤと呼ぶハナレがある。家にもよるが、シノヤにフロヤベンジョが置かれる。シノヤの2階に6畳ほどの部屋があり、新婚夫婦はここで生

活を始める。両親が寝るのは母屋の納戸だが、結婚したからといってすぐに息子夫婦が納戸で寝ることはない。寝る場所が変わるのは子どもができてからで、子どもが成長してそろそろ子供部屋が欲しいとなったとき、シノヤ2階の部屋を子どもへ譲って息子夫婦は降りてくることが多い。主婦として食事をつくる者は誰かについては、もちろん姑との関係にもよるが、比較的早い段階から嫁がすべてつくる家はある。

子育て地蔵 これも子ども時代の記憶はない。綱井でこの道を通っていた人なら知っているかもしれない。この道は登下校道でもあったが、学校まで1時間くらいかけて来る子どもたちもいた。雪が降ったときだったか、みんなが昼飯を食っている昼飯時によく「おはよう！」と登校してきた。当時はみんな歩いて登校していたから、雪が積もればそういうことにもなった。

萱島酒造 西の関という名前の清酒をつくっている。西の大関を目指すという意味での命名と聞く。開業は明治6年。この辺りで十分な米ができるようになってから。最初に米を確認しに来て、大丈夫だとなってそれからここで酒造りを始めた。日本酒造りに必要なものは米と水と酵母だが、米は県産米が7割、あとは広島とか兵庫の酒米を使っている。水はボーリングを掘って得ている。30~40mも掘れば水が出るが、ここの水は88mの地下水を使っている。両子山の伏流水である。この辺りは地表では水は得にくく溜池が発達したが、地下水は豊富である。硬度は20度あり、軟水の甘い水である。酵母は協会酵母を使っており、701とか901、吟醸は熊本酵母を使っている。

むかしは各家庭にテレビはなく、この辺りでテレビがあったのは萱島酒造だけだったので、みんな集まってテレビを見ていた。相撲などを見たが、初代若乃花の時代だった。あと高橋医院にもテレビがあり、そこで天皇陛下の結婚式で美智子様を見た記憶がある。むかしは学校にもテレビはなかったように思う。理科室にあったろうか？記憶が定かでない。骸骨がおぞかった [怖かった] のは覚えている。

話者

清成隆さん（国東市観光課主幹兼観光係長）、清原正義さん（世界農業遺産旭日プロジェクト事務局長）、高橋貴人さん（世界農業遺産旭日プロジェクト監事）、平野文昭さん（み仏の里くにさきウォーキング大会実行委員会会長）、山下昇さん（み仏の里くにさきウォーキング大会実行委員会）、山本純生さん（綱井区副区長）とお孫さん（旭日小児童）、志丸ますみさん、後藤ちずこさん、小陽すみこさん、クラブTSA（綱井シニア歩こう会）の皆さん [活動は月2回、第2第4日曜日、2017年4月から3年目になる。現在会員16名]、池田信一さん、山本菊美さん、山本千代美さん、萱島酒造の平野さん

調査日

2016年10月8日、10月30日、2017年1月27～28日

参考文献

くにさき史談会『くにさき史談』第8集（特集 国東町の溜池調査）、平成19年10月

*「八、旭日地区」（pp.99-114）

p.107～高橋貴人「綱井の溜池について」中、

p.108「この池〔高雄池のこと〕の築造により「嫁に行くとも綱井にいくな」と言われ、貢米八斗しか納められなかった年もあった一寒村が、その後は貢米三百石をも超える豊かな村になった」

国東町史刊行会編『国東町史』国東町教育委員会、昭和48年8月30日

*「民謡」（pp.795-804）中、

p.798「六、盆踊り唄」六調子（萱島信任〔かやしま・のぶとう〕翁の功德をしのんで）

p.799

三、今を去ること百有余年　　当時綱井は畑作ばかり

　　稲は植えても干害うけて　　秋の実は糶〔しいな＝十分に実っていない粃〕ばかり

四、粟のご飯に甘藷きび団子　　嫁にやるとも綱井にやるな

　　言われましたる一寒村で　　そこで庄屋の信任翁は

国東町記念誌編集委員会『国東 国東町閉村記念誌』国東町役場、平成18年(2006)

以上が今回の聞き書き調査で得られた情報である。具体的な調査日程としては、2016年末に数回ウォーキングイベントへ参加させて頂くなかで地域の全体的な雰囲気把握し、それを持ち帰って立てられそうなテーマをいくつか検討して絞り、年が明けてからそれらテーマに近い項目を集中して聞き書きを行なった。筆者が注目したのは、当初は谷に囲まれた地理的空間と生業とのかかわり具合だったが、そのなかで浮かび上がってきた興味深いキーワードは「嫁にやるとも綱井へやるな」という言説だった。これはもちろん水に苦勞した地元農業の状況と溜池の成立を説明するために語られるものだが、しかしここで初めて綱井に生きる人たちの「生の感情」に触れた思いがした。それはこれまで説明を受けてきたような〈歴史的記述〉ではなく、〈感情移入的挿話〉として映った。そこから翻って状況を見直すと、旭日地区の皆さんが制作された『旭日ため歩き本』の記述は、天神様や大師堂など、いわば〈歴史的記述〉が満載である。つまりこれをベースに何か新しい様式を提案するならば、これに〈感受移入的挿話〉を加えたフットパスを描いたらどうなるだろうと考えた。そのために、綱井の盆踊りで口説かれる「嫁になるとも」という言説から「実際に綱井へ嫁に来た人たちはどういう思いを胸にこの地に生きてきたのだろうか」という新しいテーマを立て、婚姻の項目に絞って調査した流

れが上記聞き書きである。特に後半は女性からの視点にスポットを当ててコースを描くよう心がけた。それは、これまでパンフレットの多くが歴史記述的、かつ男性的だったからである。実質的な調査はわずか2日間しか確保できなかったが、フィールドからこの地に生きた人々の、生き活きとした記憶資料が得られた。

(3) フットパス・マップの作成

前節での調査結果から2枚の下絵を制作した。一枚は表紙絵、もう一枚はフットパス・マップのイメージである。これらについていくつか説明を加える。

〈表紙について〉

・まずタイトルを原本の「さ吉くん ほのぼのコース」から「嫁にやるとも」とした。これはもちろん「綱井にやるな」につながる有名な口説の一節で、地元の方々が地元を紹介するときに遣われるように、綱井の歴史や生活環境を表すのにぴったりなフレーズである。ただし、このコースは単に綱井がとても貧乏で苦勞したことを伝えようとするものではない。そうした場所に実際生身の人間たちが生き、そして「嫁に行くなら綱井において」とまでなった綱井の長い歴史と人間ドラマを伝えたいと願うものである。ガイドはその点に留意して説明せねばならない。

・できれば国東半島・宇佐地域全体で、フットパスコースの通し番号をつけるのが望ましい。これは参加客から見て、全体にどれほどあるうちの一つなのか、あと何回遊びに来られるのかなど分かるものとなる。ただし数が増えれば管理が大変になるので、そのための協議会や打ち合わせも必要となろう。

・今回は制作しなかったが、上記の理由から、裏表紙にはこれら国東半島・宇佐地域フットパスの全体図と連絡先が明記してあると望ましい。

・このような地元根ざした、しかし一見してすぐに理解でない（謎かけ的な）タイトルをつけるとき、補助的なサブタイトルをつけることが望ましい。たとえば今回の綱井ならば「--綱井のため池システムと結婚式--」などがいいだろう。そうしたテーマを持ってウォーキングをスタートすれば、ウォーキングに地域探検的なテーマ性が出てくる。

・表紙の下には共通して、ウォーキングへ参加する際の注意点を掲載しておく。具体的には、互いのルールやマナーを守ることを明記し、実際に人が生きている場所にお邪魔するのだ、遊園地ではないのだということを来訪者たちに自覚してもらい、また地元にも活動の趣旨を理解してもらうことを促す。

・このほか表紙に掲載できる情報としては、ウォーキングに必要な時間、距離、消費カロリー、傾斜地の難易度、類似の他のウォーキングコースなどもすべてのパンフレット

に共通して掲載できる。

〈フットパスについて〉

・道路上にコースを（たとえば点線などで）明記するかどうかは議論の分かれるところである。なぜなら、特に地方では、自分の家のすぐ前や後ろの小道がコースとなり、見知らぬ人たちがゾロゾロ歩くことを好まない人たちも少なくないためだ。地域全員で了承がとれている場合は良いが、そうでない場合は詳細なルートは明示せず、ガイドが現場で誘導するほうが好ましい。

・スタートからゴール地点までは一筆書きになるように設定する。これはたいていの場合、スタート地点へ車で集合するためだ。逆に、途中でバスや汽車を活用できる地域ではこれらを加えてコース設定したほうが来訪者たちには喜ばれるし、公共交通機関の売り上げも上がる（ただし参加費が上がることに留意）。それから、トイレ休憩の位置をガイドは必ず把握し、事前に説明しておく必要がある。

・フットパス・マップにすべての情報を記載する必要はない。むしろ、記載しないほうが良い。その理由は、すべて情報を記載してしまうと、来訪者はもうガイドが不要となるためだ。たとえば博物館では、必要最小限なキャプションを展示物の前に置いてそれは入館料で賄い、それ以上の詳しい解説はミュージアムショップで図録を購入してもらうことで賄っている。ウォーキングの場合も、パンフレットには必要最小限の紹介にとどめ、より詳しい解説は現地でガイドの口から聞くことが望ましい。

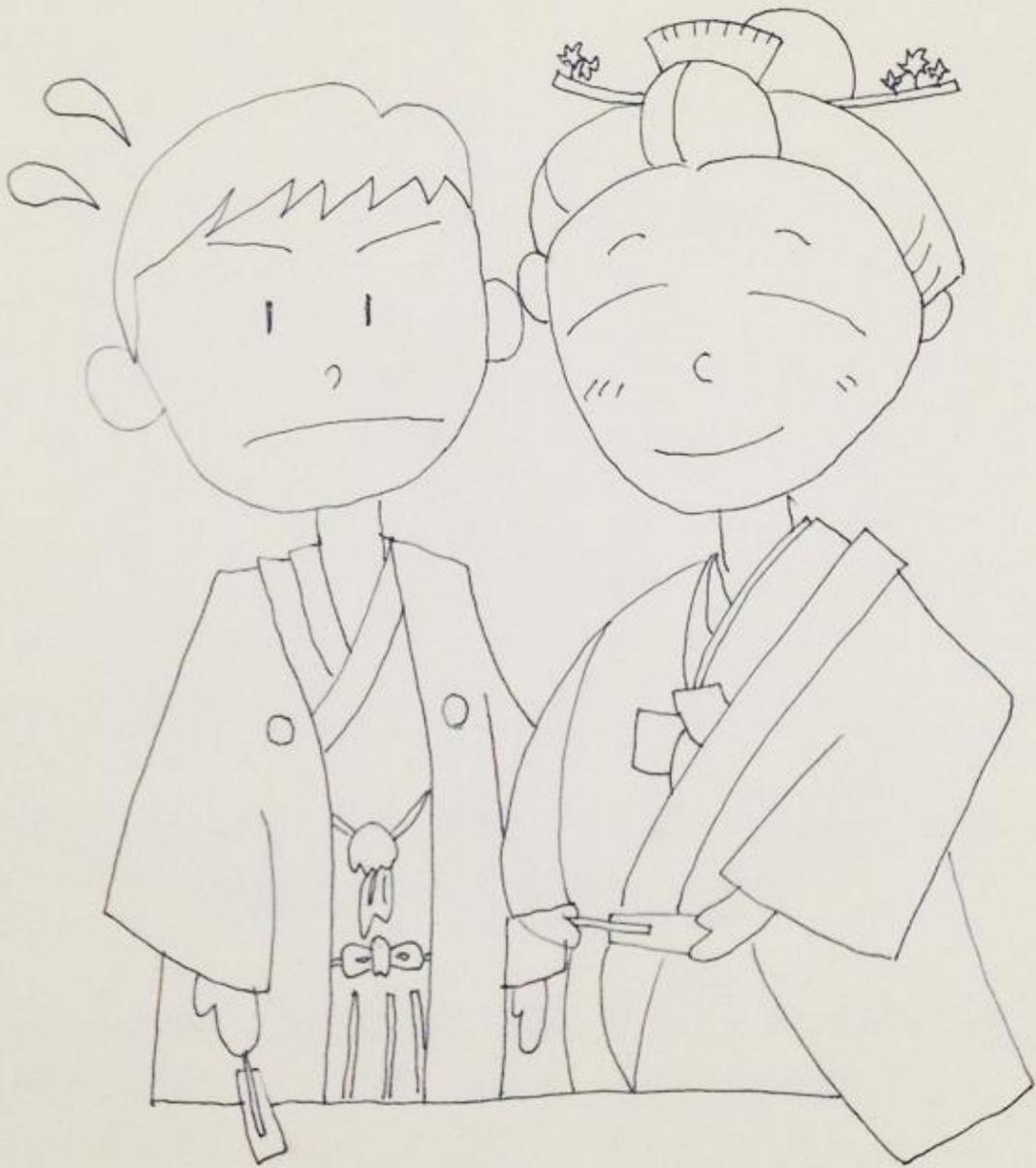
・パンフレットにすべての情報を記載してしまうと、来訪者はそれを一瞥して、もう現地へ行ったような、分かったような感覚になってしまう。それを防ぎ、興味関心を持って現地を訪れるようにするためには、名称を「？」で隠してしまうのが効果的である。たとえば今回の下絵イメージでは、原本に打たれている数字をそのまま吹き出しにして書き込んだが、この数字をすべて「？」にするだけでも魅力的なフィールドにみえてくる。

・今回特に提案したい点は〈歴史的記述〉に加えて〈感情移入的挿話〉をプラスしたことである（聞き書きデータの中で下線部を引いた部分）。これももちろん現地でガイドの口から直接聞くほうが臨場感はあるが、しかしパンフレットにもそれら一部を掲載した。これらはいわば「記憶の展示」といえる。こうした記憶資料は目に見えないため（＝無形文化遺産）、パンフレットの地図上にはなかなか掲載されない。掲載されるのは史跡や天然記念物など、場所が特定される有形物ばかりである。しかしそれら場所には、地元で生きてきた人々のさまざまな思い出や記憶が眠っている。そうした「場所の記憶」のなかから、毎回テーマを揃えて（たとえば今回の例でいえば女性や結婚式）記憶資料

を地図上へ落とせば、人間ドラマに富んだルートが出来上がる。今回は調査不足のため重厚な資料を集めきれなかったが、もっと時間をかけて調査すれば、たとえば結婚式の記憶だけでもぎっしり情報が詰まったマップができあがる。もとより来訪者たちには当該地域へ感情移入するための「とっかかり」が必要であるし、そこからより地域に寄り添った理解が深まるだろう。

嫁にやるとも

(国東町糸岡井地区)



このコースは、世界農業遺産地域である国東半島・宇佐地域をより良く理解し、より楽しくするためにつくられました。地元のルールやマナーを守り、お互い楽しくウォーキングしましょう。

昔の儀の展示



昔はギオンさん山にも
いっほいミカン畑があった。
ミカンはいいおいに
2層をせりして
出荷していた。



果の子たちはギオン山の
上から草スキーで滑り下りて
いた。スピードが速いとき
は、怖くはなると、なりの
ミカン畑に
草スキーで滑り
下っていた。



3学期の始業式は
学校でミカンをもち
のが楽いだった。
子どもたちはそれを
「ミカン式」と呼んでいた。



延享3寅天(1746)の
ハマンコヤは
1のめずらしい。

昔、子どもの死亡率
が高かったころ、
おじいちゃん
おばあちゃん
が、

オウゴンサマと
おはな子。おはな子
大師にアサヒの
地蔵さまを
文政2年(1819)の
年か金持ち。



おじいちゃん、おばあちゃん
買ってよく魚つりに出かけた。
コイ、フナ、ドコ、池にいて、
海へはくはつておはな子もいた。



ハマンコヤは子どもに
しては遊び場でも
あった。雨が降り出したら
大木でシートをかき
込んだ。



昔の結婚式は何日か続けて
大変だった。お茶が飲めなくて、翌朝
記念すべき第1回目の
夫婦喧嘩(笑)

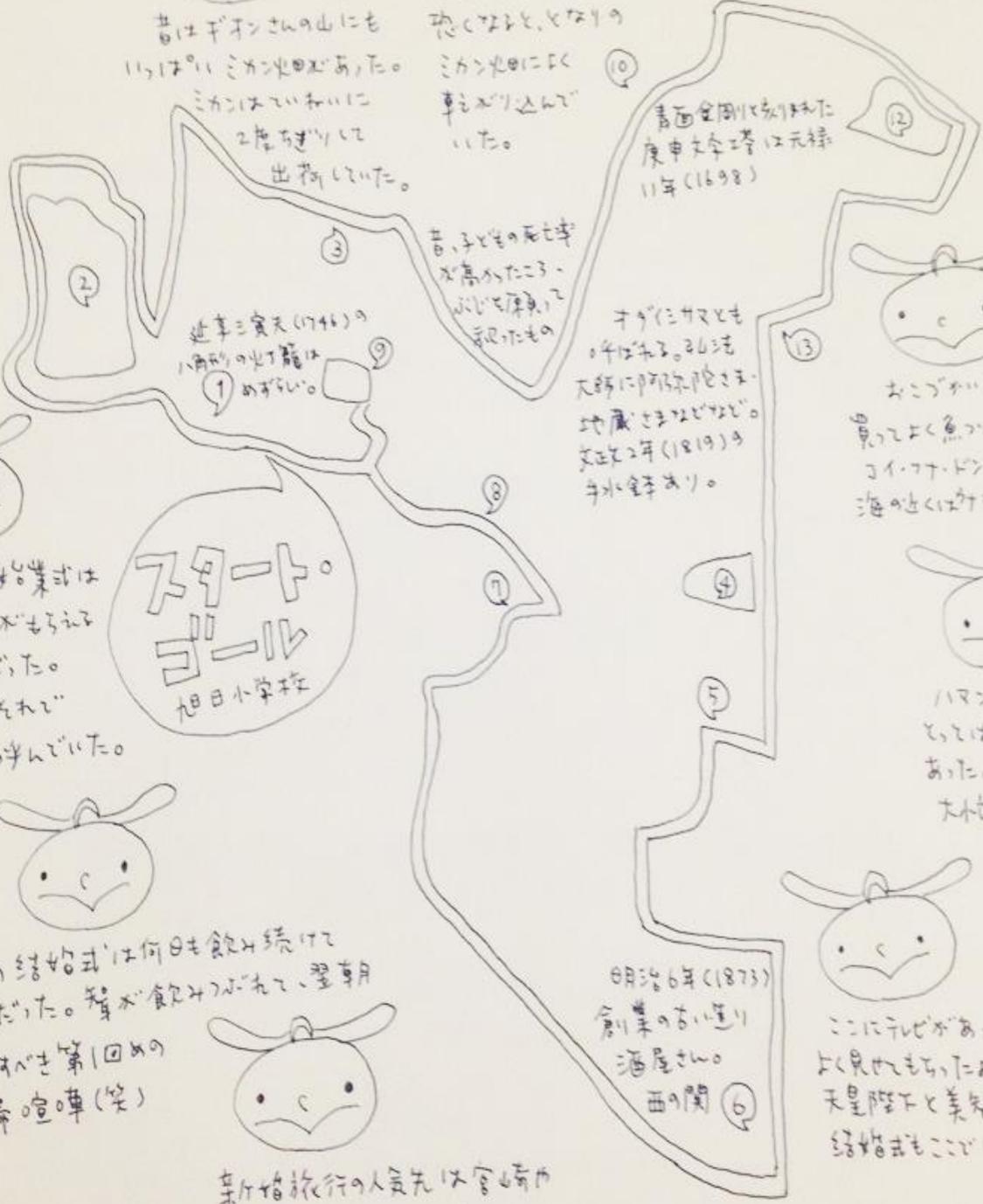


新婚旅行の先は富山から
長崎。おんが馬車が見送りに
来てくれた。アキをくんで出発した。
オボウシおじ、スピードが速いから
怖かった。

明治6年(1873)
創業の古い酒
屋さん。
田の関



ここにテレビがあったので
よく見てもらったよ。
天皇陛下と美智子様の
結婚式もここを見たよ。



(4) まとめと提言

本項の目的は、国東半島・宇佐地域世界農業遺産における農文化ストーリーを掘り起こし、提案することであった。フィールドとして選択した国東町綱井地区には、これまで大分県世界農業遺産関係者らが紹介してきたような顕著な民俗芸能や民俗儀礼（たとえば修正鬼会やケベス祭り）はみられなかったため、ではなにがみられるのかというフィールドワークと聞き取り調査から行なった。その結果、高雄池—美迫池—迫池といった複数の溜池を組み合わせる農業システムと、それに付随して語られる盆踊りの口説が見つかった。そこでこれらを総合的に一つの地域ドラマとして語るためのストーリーづくりに取り掛かった。綱井には、稲作やシットウ、ミカン栽培、海漁とさまざまな生業がみられたが、それらをただ淡々と論述するのではなく、女性の目から見た記憶情報を集めてみた。すると子どもの頃の学校の遊び、男の子と女の子の違い、子どもの目からみた親の仕事から、結婚相手の見つけかた、嫁入り時の笑いや涙、嫁ぎ先での農業の苦勞、子が生まれた喜びなど（これらの多くは調査しきれなかった部分ではあるが）、来訪者たちが綱井を訪れた際に、同じ人間としてこの地へ感情移入できる切り口がさまざま見つかった。そこでそうした記憶を改めて地図上に落としフットパス・マップの下絵を制作した。

これらいわば「記憶の旅」を通して、来訪者たちは「嫁にやるとも」という言説が持つ意味と重みを感じられるだろう。山に挟まれた谷において、しかも山と海が近接する地区において、水を確保し農業で生活を成り立たせることが如何に大変であったか。稲作とシットウを組み合わせた家族経営の上に人々の生計が成り立ってきたのであり、子どもから老人までいつも家族が支え合い生きることが必要だった。「一人は食えども、二人なら食える」という父親の叱咤激励は、この地に生きる姿勢を象徴しているように感じられる。そうした地で嫁さんを貰うということの、男性としての責任感の重みもあったろう。それでも女性たちは希望を胸にこの地へやって来た。結婚式は笑いと涙の連続だった。綱井は決してただ経済的に困窮した、惨めで嫁にやりたくない土地ではなかった。彼らは生計のために、子どもや家族のために、長い年月をかけて自然と組みあい、溜池を張り巡らせた持続可能な循環型社会を築き上げてきた。ガイドはそうした「この土地の記憶」こそを来訪者たちへ伝えるべきである。この地に継承される伝統的な農業を失うことは、そうした記憶、技術と知識、家族観、人生観、社会観の体系をも失うことになるだろう。そこまで説明して初めて、世界農業遺産として、伝統農業を守ることがこの地の文化も守ることにつながることを、来訪者たちは実感できるのではないだろうか。文化とはなにも重要無形民俗文化財だけではない。自分たちが自分たちであること、そうしたアイデンティティも文化であるし、地域の人々の記憶そのものがなにより無形文化遺産である。このマップは未完成だが、地元の方々の手でより充実した完成品へ高められ、農文化が保全されることを期待する。

願わくば、そうした地域への共感を経たのちに、それでは次に来訪者たちがどうすればこの世界農業遺産地を支援できるのかという具体的な接点が用意されることが期待される。たとえば同じ世界農業遺産である熊本県阿蘇地域では、目の前に広がる草原の山がなぜ森にならずに

草原を維持しているのか、説明しなければ誰も分からない農業システムを来訪者たちへ伝えることが GIAHS の重要な使命となっている。そのことにより、過酷な環境に生きているリアルな人々の人生を体感し、自分自身の人生に重ね合わせ、できる範囲で支援しようという次のステップへつながっていく。具体的には、阿蘇の農産物の購入やレストランでの食事、あか牛オーナー制度や野焼きボランティア活動への参加、産直農家の顧客として契約する来訪者たちもいる。国東半島においても、こうした次なるステップへの用意が期待されよう。今回の調査で、旭日の人々は現金収入としてシットウ、ミカン、タバコ、キウイ、カボス、オリーブ、ヒマワリと変遷しながら商品作物を栽培してきたことが分かった。それではそうした現在のオリーブやヒマワリなどの農産品はどこで購入できるのか。ウォーキングイベント終了後に販売したり、道の駅物産展等へ誘導することが望ましい。

付随してもう一つ指摘しておく、記憶情報のような無形文化遺産は、文字に起こさなければ目に見ることができない。つまり、誰かが筆記することが必要となる。地元のツーリズムに参加して気がついたのは、場所場所を通りかかる度に、そこで貴重な思い出話を語っている人々がいた。周囲にいる人たちはみな感心して聞いていた。それらは貴重な記憶資料であるが、しかし筆者以外の誰も筆記していないため、もし記録しなければそれら資料は永久にこの世に残らず消え去っただろう。語れることと、記せることは同じではない。たとえ記憶を多く持っているかたであっても、それを体系づけて記せる人はほとんどいない。今回筆者が行なったような、記録係をどなたか現地に置くべきである。もし見つからなければ、ビデオカメラで撮影しておくだけでもよい。後世どなたかが文字起こしをしてくれるだろう。またこうした視点に立ち、ウォーキングのコースや趣旨もそれに合わせて立てることができる。つまり、どここの地区の記憶情報が足りないから、今度はその地区に思い出をたくさん持っている人たちを集めて一緒に歩きながら記録していこう、というイベントができあがる。記憶の記録作業を、地元の高中生や大学生に手伝ってもらえれば、世代間交流という意味でも効果的だ。また、介護福祉現場ではこうした懐かしい記憶をもとに認知症治療などにあたる療法を回想法と呼んでいる。文化行政のみならず福祉行政とのコラボレーションも可能だろう。

このほか、今回実証できなかった情報発信のための試みを提言としていくつかあげるならば、たとえば AR の試みなどは有意義かもしれない。AR とは **Augmented Reality** (拡張現実) のことであり、現実の空間にコンピュータ上のデータを層畳する技術である。これは **VR** (**Virtual Reality**=仮想現実) と対比して考えると理解しやすい。たとえば現在、机上のコンピュータを使い **Google** ストリートビューで国東半島を旅することができるが、これは実際に国東半島へ来ているわけではなく、机上にあるコンピュータで旅するすべてが仮想のもの (**VR**) である。それに対して **AR** は、実際の生活空間における物質上に、コンピュータの情報を層畳させる。たとえば綱井の浜辺へ行き、そこにある物体(木柱でもなんでもよい)をマーカーとして、前項であげたかつての古写真を映し出すことができる。映し出すデバイスはスマートフォンでもよいが、もし **AR** メガネを使えば、かつての古写真の世界が眼前に広がり、まるでタイムスリップしたように見えるかもしれない(これを現地でやらずに、オキュラスリフトのようなヴ

ァーチャルなメガネの中でだけ映し出せばVRとなる)。映し出されている映像情報はコンピュータからのヴァァーチャルだが、しかし目の前の浜辺はリアルな現実世界であるためARと呼ばれる(現実に見える世界の情報を拡張する、という意味である)。

現在、綱井地区ではウォォーキングコースの整備を進める中で、案内板の設置も精力的に進めており、そこにQRコードでの情報提供も試みられている。このQRコードでの情報提供は、看板をできる限りおさえて現地の美しい景観を保全するとともに、外国人来訪者たちへ外国語の情報を提供することもできる。これはARも同じである。ただしここで問題となるのは、国東半島のインターネット環境が現在は強固でなく、大量の情報処理が難しいことである。これは地元の人々の努力だけでは困難なため、今後の環境改善を期待したい。

またもう一つ現在できる試みを提言するならば、SNSの分析を通した来訪者たちのニーズ調査である。これらの分析から、来訪者たちが特に好むテーマに沿ったストーリーづくりや、フットパス・マップづくりが可能であるし、また逆に手薄な分野へのテコ入れも検討できるだろう。これについては、次の小課題1-2で詳しく述べることとする。

小課題 1-2. 外国人旅行者への情報発信

(1) 問題の所在と本項の目的

国東半島・宇佐地域世界農業遺産の自然的コンテンツのみならず文化的コンテンツも検討され、魅力的なフットパスも整備されたとなると、次はそれら情報をどう外部へ発信していくかという課題が出てくる。特に GIAHS は世界的な制度であるため、これに興味関心を覚える者は日本人ばかりとは限らない。むしろ世界農業遺産登録を機に世界へ国東半島・宇佐地域を知らしめ、交流人口を増やす絶好の機会である。

そのためまず現況がどうなっているのかを探るのが小課題 1-2 の目的である。具体的には 2 つ調査を行なう。一つは、もうすでに実施されているウォーキングイベントや宿泊施設などを利用して外国人がどう感じるか、彼らが好む点や、日本人が気づかない問題点がないかを探る。もう一つは、まだ実施されていない手薄な項目を見つけ出すために SNS の投稿分析を行なう。そして両者を合わせて最後にまとめと提言を行なう。

(2) 外国人へのヒアリング調査

2016 年 10 月 7～8 日、11 月 12～13 日、12 月 3～4 日の 3 回にわたり、国東半島・宇佐地域で行なわれたウォーキングイベントへ外国人が実際に参加して参与観察を行なった。参加対象国は中国と台湾の男女 4 人（男性 1、女性 3）である。

イベント終了後、彼らの意見をヒアリングし、集計したのが下記の表である。ここでは A. ウォーキングイベントに参加した外国人の意見、B. 現地で食べた食事に関する外国人の意見、C. 景観に関する外国人の意見、D. 宿泊施設に関する外国人の意見、E. 宿泊施設で提供された食事に関する外国人の意見、F. GIAHS 全般に関する外国人の意見、の順に紹介する。なお、彼らの意見は原語（中国語）で収集されたが、表中は筆者の抄訳であり詳細は後述する。

A. ウォーキングイベントに参加した外国人の意見

好まれた点	好まれなかった点
イベントの係りの方々や地元住民の皆さんがとても友好的で、ウォーキング中もずっと気をかけてくれた。	ルート上の案内板や説明がすべて日本語のため、これらは外国人は全く理解することができない。
ウォーキングイベントを通して、この地が GIAHS であることを理解し、季節の農産物や食事を食べられるのが嬉しい。	英語か、その他の言語のパンフレットがあれば有難い。
国東半島が神仏と共存している興味深い文化を体験することができた。	10/7 棚田に行ったときとても美しかった。でも蚊がすごく多かった。もし可能なら事前に知らせてくれたり虫除けスプレーを借りられると有難い。
こうした活動により、運動することもでき、	10/8 美迫池の周辺は蚊が多すぎる！地元の

また美しい自然や景観も楽しむことができ、大変収穫があった。	かたは気づいていないのでは。来訪者は絶対虫除けスプレーが必要。
活動中ずっと解説の方がつくので、この地の活動や内容、GIAHSであることを参加者が理解するのに助かっている。	12/4 雨が降り、山路は足元が大変ぬかるんで、年配者は杖が必要、大変滑りやすいようだった。
12/4 比較的長いコースだったが、しかし途中で休憩をとりながら美しい景色を楽しめたので、それほど疲れは感じなかった。	12/4 雨が降り、参加者がみな傘を開くので隊列が広がって声が届かず、解説がわからなかった。レインコートが希望者に配られると嬉しい。
スタッフの皆さんがとても友好的でアンケート調査が完了できたのは本当に嬉しかったし、ぶじ情報も得られた。	雨天時の代替ルートがなかったので、12/4の雨天時は歩きづらく、隊列が長くなり、よく聞き取れなかった。
食事後、くじ引きのお楽しみがあったのが、より楽しかった。	ゴール後、付近に椅子など休憩できるスペースがなかったのは不便だった。
環境保全の観点から言えば、これは良い活動だ。	トイレの数が少なく、長い時間並ばねばならなかった。

B. 現地で食べた食事に関する外国人の意見

好まれた点	好まれなかった点
11/13 公民館で頂いた食事がとても美味しかった（豚汁スープも美味だった）。	10/7 蕎麦を食べに行ったとき、子どもにお冷やを出しているのを見たのは驚いた。
12/4 雨が降りとても寒かったが、お昼ご飯のスタッフの皆さんが温かいお茶や暖房を用意して下さった。	お昼のお弁当が冷めていた。胃腸が悪いお客さんもいるかもしれないので、そこは不便。
ゴール後、近くで色々な美味しい食べ物が食べられるイベントがあって、そこでお昼ご飯を楽しむことができた。	

C. 景観に関する外国人の意見

好まれた点	好まれなかった点
田畑のあちこちでイノシシ除けのネットが張られているのは興味深かった。	
かかしの風景はとても特色がある。	

D. 宿泊施設に関する外国人の意見

好まれた点	好まれなかった点

10/7 いっちゃんばっちゃんさんに泊まったとき、お客さんが4人だけでも受け入れて貰えたのは驚いた。日本の「農家民宿生活体験」的な教育方式は得難いもの。	10/7 日本ではお客さんを座敷に泊めることも多いが、見知らぬご先祖様たちの位牌と同じ部屋に泊まるのは、台湾人には正直怖い感じがする。
10/7 いっちゃんばっちゃんさんはとても清潔で、おばちゃんもとても親切！寝る前に果物まで切り分けて下さり、本当に家族のような感じだった。	10/7 民宿にドライヤーがなかったことと、WiFiがなかったことが不便だった。
12/2 ホテルベイグランドからイベント会場までが遠くなく、遠方からの参加者も便利が良いと感じた。	11/12 宿泊先の旅館の部屋にトイレや洗面台がなかったのは不便だった。
11/2 海喜荘の雰囲気は地元の特色があり、ホテルと違う雰囲気で、部屋の施設は日本人の住居のように感じた。旅館内の眺めもよく従業員もとても優しく親切だった。	11/12 宿泊先の旅館のWiFiが不安定で、部屋まで届かず、外国人客には大変不便だろうと感じた。
ホテルベイグランドは部屋でもWiFiが使えたので大変よかった。	12/2 宿泊先のホテルの部屋に風呂がなく、公衆の大浴場しかないのは本当に不便。外国人には受け入れがたい。
ホテルベイグランドの室内環境は清潔で、施設も問題なく、早朝窓から見える朝日はたいへん美しかった。	11/12 宿泊先の旅館のお風呂場が大きくなり、1回に2人くらいしか入れないので、他の人は待たねばならなかった。
	旅館の周辺は基本的に夜は何も見ることがなく、せっかくの旅行客にはもったいないと感じた。

E. 宿泊施設で提供された食事に関する外国人の意見

好まれた点	好まれなかった点
民宿いっちゃんばっちゃんさんでは夕食がなかったのですが、松風さんを紹介してもらったがとても美味しかった！しかも送迎までしてもらえて有難かった。	ホテルでの朝食と夕食は典型的な和食スタイルのみだったので、洋食も合わせて選択できればより良かった。
民宿いっちゃんばっちゃんさんの朝ごはんは種類がとても豊富だった。	
12/2 ホテルベイグランドの朝食と夕食は全て典型的な和食スタイルで、美味しいし綺麗だし芸術品のようだった。	

F.GIAHS 全般に関する外国人の意見

好まれた点	好まれなかった点
	食事を頂くときに、地元 GIAHS の特産品であるシイタケが食べられる機会が少ないことは残念に感じた。
	地元 GIAHS の農産品とこうした健康イベントとの関係があまりないように感じた。たとえば地元 GIAHS のシイタケを食べる機会が活動中なかった。

「A. ウォーキングイベントに参加した外国人の意見」は、気持ち良くウォーキングに参加できることやホストの方々が大変親切だという利点、それから雨天時の心配やトイレの確保の問題点など、日本人の感想とほぼ同じ内容の意見が集まったように見える。これらは特に外国人だからといって別途対応を考えねばならないことではないが、強いて国東半島・宇佐地域において気をつけたいのは、やぶ蚊の問題である。これは溜池の多い地域ならではの問題であるが、すでにそうした環境に慣れてしまった人々にとっては、それほど多いと感じられないかもしれない（たとえば阿蘇地域においてはハエが多いが、地元の方々にとっては食事の間でさえもすでに気にならなくなっており、参加者から度々指摘される場所である）。台湾ではこうしたルートを紹介する場合、紹介側は事前にきちんと告知することが義務づけられており、虫除けスプレーなどを用意しなければ大きな批判を受けることになるので注意したい。

「B. 現地で食べた食事に関する外国人の意見」について、食事は日本人だけでなく外国人参加者にとっても大きな魅力であるが、しかし食文化のちょっとした違いを見落としがちのため注意しなければならない。今回はたとえばイスラム教徒など豚食をタブーとするような分かりやすい問題はなかったが、日本人が気をつけたいのは、冷えた飲食に対する感覚の違いである。表の中で「お冷やを出しているのを見て驚いた」とあるのは、中国や台湾ではまずお冷やを出すという文化がなく、むしろ良くないこととされているためだ。台湾でもし、子どもが冷たい水を飲もうとすると親は必ず叱りつける。冷たい水は身体に良くないと考えられているため、それを叱るのは子どもの健康を守る親の務めであり、両親は常に気をつけている。だから小さい子どもがいるときは冷たい水は出さないほうがいい。それから、冷めたお弁当が美味しいというのも日本独特の感覚である。良い点としてあげられている、豚汁が美味しかったとか温かいお茶が嬉しかったと書いてあるのは、裏を返せば、ようやくそうした温かいものを口にできて有難かったという感情の婉曲である。実際に彼らは身体が慣れていないため、冷たいものを口にしたときにお腹を壊す者も少なくない。それでは中国や台湾のウォーキングではどうなっているかといえば、やはり温かい火鍋やバーベキューを囲んで皆で食べたり、冷たいものの場合サンドウィッチのような洋食のほうが抵抗はないようだ。このイメージが、最後の「F. GIAHS

全般に関する外国人の意見」でもみられる。ここで「シイタケを食べる機会が活動中なかった」とあるのは、中国でも台湾でもこうしたウォーキングイベントとその対象である農産物は必ずつなぎ合わされていて、たとえばイベントのあとでシイタケ鍋が出されたり、お客はシイタケを自分で購入して鍋へ入れることができるようになっているため（温かい食べ物＋農産物販売促進）、そうした連携が全くない日本のイベントは不思議にみえたようだ。

「C. 景観に関する外国人の意見」について、かかしは理解しやすいが、イノシシ除けのネットが興味深かったとあるのは、台湾ではイノシシ肉を食べる原住民たちの文化があり、またそれを売りにしている原住民レストランも人気で、こうした人々によりイノシシはすべて食べられてしまうから、こうした問題が起り得ないためである。

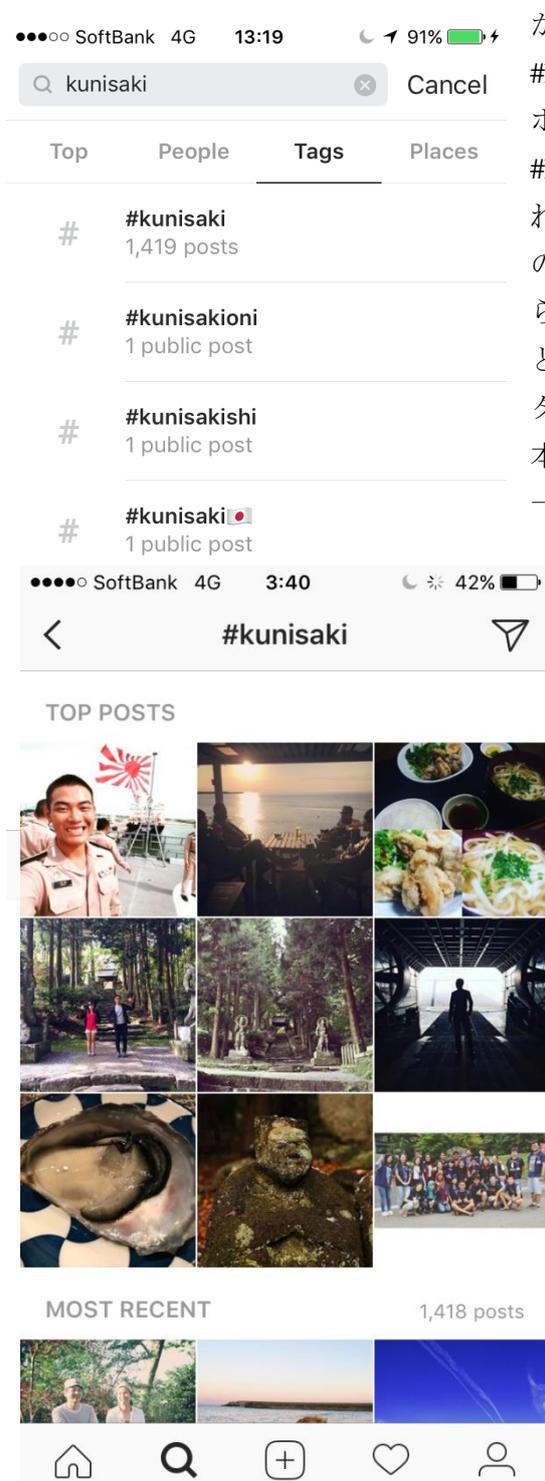
「D. 宿泊施設に関する外国人の意見」について、民宿・旅館・ホテルとそれぞれひと通り体験してもらったが、各々において意見が得られた。共通してみられた大きな問題点は WiFi と風呂であった。言葉が上手く通じず、情報へのアクセスがインターネットのみである外国人訪問客においては WiFi が使えるかどうかはいわば死活問題である。少なくとも宿泊施設で使えないということでは足が遠のいてしまうのはやむを得ないだろう。また公衆浴場に対する感覚が全く違うためこれも注意が必要である。たとえば日本人ならば温泉と聞くだけで大きな期待と満足感を得られる者が少なくないが、熱い湯につかるという習慣がなく、また見知らぬ人の前で裸をさらす習慣もない外国人にとっては、それらは楽しみではなく苦痛となる。だからといって設備を改修する必要までは全くないが（宿を選ぶことはできるため）、少なくとも「温泉」と聞けばみな喜ぶわけではないことはホスト側として留意しておかねばならないだろう。表中、少人数で受け入れてもらえて驚いたとあるのは、台湾で民宿といえれば少なくとも十数人が泊まるようになっている比較的大規模なものだからである。台湾の民宿は教育ではなく一種のビジネスであるため、こういう教育的な受け入れ（修学旅行も受け入れていることを知ったため）に対して大変感心したようだ。

「E. 宿泊施設で提供された食事に関する外国人の意見」は、同じく食事に関する意見ではあるが、ウォーキングでの一番の懸念である冷めた食事ではないため、それら問題点は出てこなかった。むしろ注意したいのは、日本風の食事はもちろん好まれるが、日本風でない食事也好まれるということである。これは確かに我々が海外へ旅行に行っても、あるいはずっと日本国内であっても同じく感じることで、外国人だからといってもいつも日本食では飽きてしまうことは改めて認識してよいだろう。これは他地域での調査だが、外国人の SNS を分析していて、そこで紹介される食文化が必ずしも和風のものばかりでないことが窺えたことは多々ある。たとえばピザであるとか珈琲など、彼らもそうしたありきたりな洋食ももちろん必要であるし、またたとえば韓国人が日本の豚キムチ炒めを写真に撮ってインターネットへあげている例もみた。自らの国にある食事でも、若干違うところが面白いのだろう。つまり、気負って毎回和風で対処する必要もないと言えよう。実際、国東半島・宇佐地域において外国人がどんな写真を SNS へ上げているかは、次項において検討する。

(3) SNS 分析

2010年10月にApp Storeに登場したインスタグラムは、わずか2ヶ月間で1,000万人のユーザーを世界中から獲得し、その後も順調にユーザーを増やし、2016年6月その数は5億人を超える写真共有SNSである。このSNSは文字が中心であるフェイスブックやツイッターと違い、写真をコミュニケーションの基盤に据えているため、使用言語を越えて世界中の人々が交流を楽しむことができる。昨今のユーザーは、旅先で心に残る風景を目にすると、それを撮影してインスタグラムなどへ投稿する。つまり逆に言えば、投稿された写真を見れば、旅行者がどんな風景に目を奪われたかが分析できる。

いま(2017年2月25日現在)試みに #kunisaki というハッシュタグでどのような投稿がなされているかをみると、1,419の投稿がなされていることが分かる。関連タグとしてはこのほ



か多い順で #kunisakipeninsula の 135 ポスト、 #kunisakiartfestival の 59 ポスト、 #kunisakistudio の 56 ポスト、 #kunisakiretreat の 45 ポスト、 #kunisakipeninsulajourney の 31 ポストなどが散見される。このうち2つめは国東半島芸術祭に関するものであるが、3つめは米国にある個人窯(投稿名から、彼の苗字が kunisaki らしい)、4つめは walkjapan という名のユーザ(外国人)が個人的に使っているタグ、5つめは kunisakijourney という名のユーザ(日本人)が個人的に使っているタグのため、いずれも一般旅行者による気軽な投稿というものではない。

また #kunisakipeninsula というポストも 11 あるが、これは tukino_minato という名のユーザ(日本人)のみによるタグで、スペルミスと思われるため実質的には #kunisakipeninsula と合算できる。同じく #kunisakipeninsulua も 5 あるがこれもスペルミスと思われる(こうして情報は散乱している)。このほか関連して旅行者があげそうなタグとしては、 #kunisaki_city の 13、 #kunisakicity の 4、 #kunisakioyster の 5 などがあるが、いずれも投稿数は多くない。これらのタグは1枚の写真に複数重複して付けられているため、本項では #kunisaki を代表させて分析を行なう。

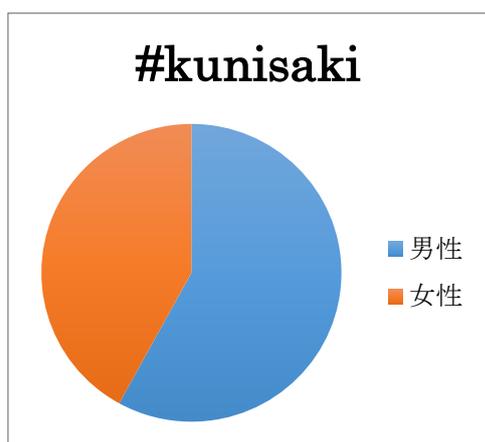
#kunisaki というタグがつけられた投稿のうち、コメントに使用されている言語や、ほかの投稿内容とも照らし合わせ、外国人(日系人含む)

によるものと思われるものを 50 ポスト抽出した。外国人であれば、単独の旅行者であれ、日本人との国際結婚者であれ、APU の学生であれ、区別せずカウントした。ただし国際結婚者の家族写真（国東を伝えるものではないため）や、自衛隊の輸送艦くにさきのように同名でも関係ないものは除いた。インスタグラムは、日本人であっても海外を意識して英語で記述する者も少なくないため、めぼしいものは発言を遡り、日本人でないかどうか吟味した。なお、これら 50 枚を見つけ出すまでにチェックした写真や動画は 350 枚にのぼった。すなわち 350 枚のうち 50 枚が外国人によるものと思われる割合となり、その数字は 14% (14.2857...) となった。以下はそれら統計結果である。

サンプル数 50

男性 29 (58.0%)

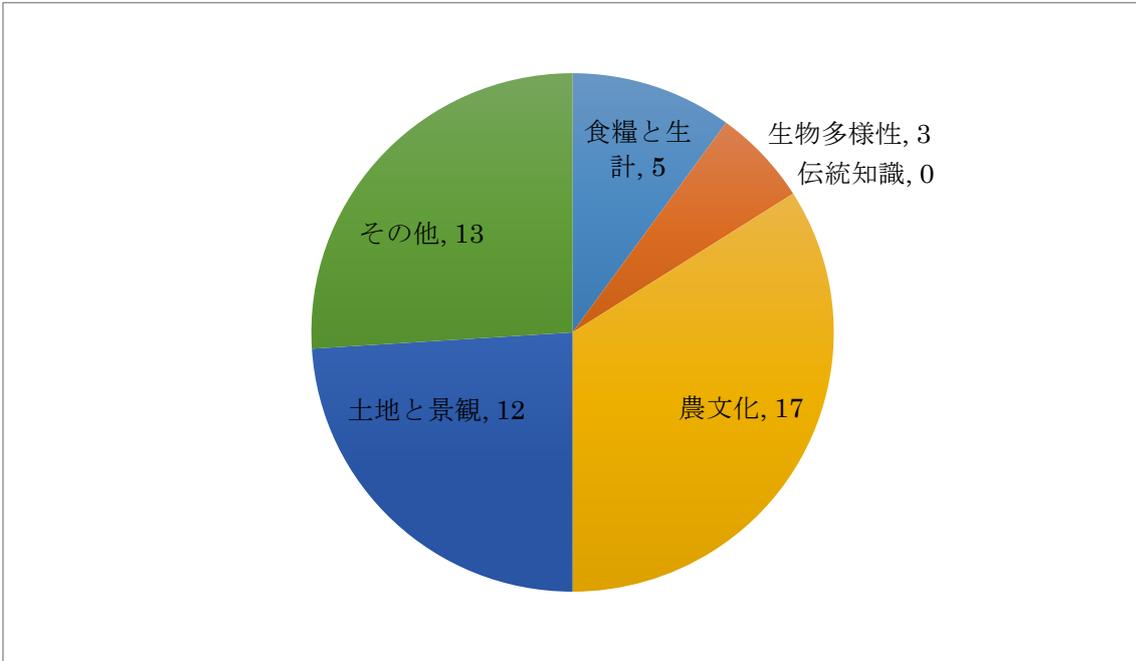
女性 21 (42.0%)



出身国別数

インドネシア	11
英国	2
韓国	5
シンガポール	2
日本人女性と結婚して日本在住の西洋人	13
タイ	2
日系人 (デンマーク、米国)	2
日本在住東洋人	6
アメリカ	1
ベトナム	1
ベトナム系オーストラリア人	1
香港	4
合計	50

世界農業遺産構成要素別ポスト



1. 食糧と生計	5	10%
2. 生物多様性	3	6%
3. 伝統知識	0	0%
4. 農文化	17	34%
5. 土地と景観	12	24%
6. その他	13	26%
合計	50	100%



「1. 食糧と生計」は、FAO が指摘する「1. Food and livelihood security」に相当するものであり、これは世界農業遺産が、世界遺産のように過去のものではなく、現実にも地元の人々の生計を成り立たせているものであるという項目である。この項目では、左図のような実りの田を撮影したものが2点確認され（西洋人および香港人）、そのほかには「喜び米」という米袋パッケージを撮影したもの（日系アメリカ人）、カキ（韓国人）、スーパーで売られているスシパックの写真（日本人女性と結婚した西洋人）がみられた。ただしカキについては確かに「くにさきオイスター」を撮影したもので、#kunisaki のタグもつ

けられたものだが、撮影場所は北海道札幌市の飲食店であるためこれだけ少し異質なデータである（国東の情報ではあるが、国東半島を実際に旅しながら見つけたものではない）。いずれにせよ、米とカキ、それに寿司以外にも多様な国東半島・宇佐地域の農産物を考えると、全体に占める10%という割合は少なく、この項目における写真投稿は今後当然増やせるものと期待される。逆に言えば、旅行者からはそれら多様な国東半島・宇佐地域の農産物情報の切り出し方が分からず、手をこまねいているともいえる。



「2. 生物多様性」は、FAO が指摘する「2. Agro-Biodiversity」に相当するものであり、伝統的な農業が希少で多様な生物種まで保全していることを評価するものである。この項目に関して今回見つけた投稿は3点あり、鬱蒼とした林床（韓国）、キノコ（国際結婚西洋人男性＝右図）、苔に覆われた大木（国際結婚西洋人男性）と、いずれも国東半島の鬱蒼とした林内で撮影されたものであったことは、地域の特徴を表すものと言えるだろう。右図には「雨後に森の中を歩くとあちこちキノコが生えてて楽しい」とコメントがあり、そうしたウォーキングも好まれることが分かる。ただし、国東半島はシイタケ栽培のメッカでありながら、シイタケ栽培そのものの写真は今回見つけることができなかった（もし見つかればこの項目ではなく先の「1. 食糧と生計」の項目に含まれるが）。6%という割合は不当に低いため、当然この項目も今後増やすことはたやすいと思われるが、しかし生物多様性においては希少種情報を下手に出すと盗掘など荒らされる恐れも充分ある

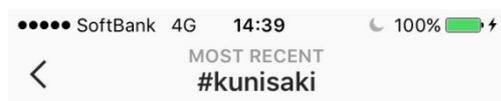
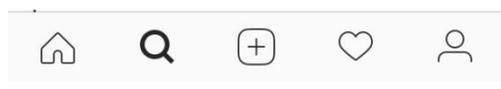
ため注意が必要である。

「3. 伝統知識」は、FAO が指摘する「3. Local and traditional knowledge system」に相当するものである。FAO はこれまで、他の国際機関と共に、世界から飢餓をなくすための取り組み（特に「緑の革命」）を推し進めてきたが、その際に伝統的な知識技術を廃し近代的農法のみを押し付けてきたという反省が生まれたために、地域に伝承される土着の知識も大切に評価しようと立てられた項目である。具体的には、その土地に伝承される農業の技術やそれに関する知恵、工夫といったソフトウェアが含まれる。これは土着の灌漑設備や土地利用といったハードウェアを評価する第5番目の項目といわば対になる概念であるが、そうしたハード遺産に対して形のない遺産であるため具体的に目につくことがなかなか難しい。今回もこの項目に相当するポストを見つけることができなかった。この項目は、国東半島・宇佐地域をただ歩くのではなく、

そこに生きる人々と実際に出会い、体験を通して発見していく部分も少なくないため、今後参加体験型のイベントが行なわれるようになれば、そこで見聞して感慨を受けた技術等が撮影されアップロードされる余地は充分考えられる。



100 likes
yogurtsiu Futago-ji Detail



17 likes
yokuyok 'Cause it's bad to do what's easy
Just because it's easy
#kunisaki
DECEMBER 2, 2016



「4. 農文化」は、FAO が指摘する「4. Cultures, value systems and social organizations」に相当するものである。この項目に関してみられた投稿は17 (34%) と最も多くなった。小課題 1-1 で述べたように、やはり海外からの観光客にとって、農文化は最も印象深く目に映るものであることがここでも明らかになった。逆に言えばもし農文化がなくなってしまう恐れがあるということである。この項目において確認された投稿には、富来神社（インドネシア）や富貴寺（シンガポール）のような単体の文化もあるが、それよりもっと多いのは、それら神仏が自然の中に佇んでいる風景を切り取ったものが顕著であった。そのためこれらは次の5番目の項目とも重複する投稿が多いのだが、こうしたいわばアニミズム（精霊崇拜）的な心象風景を表すものが外国人観光客には人気であることがうかがえる。例えば上図は韓国系人による投稿であるが、もしここに石仏が静かに鎮座していなければ、彼女の受け止めかたはまた違っていただろう。同じく、紅葉を写した写真（ベトナム）にも石塔と一緒に写されているし、山並みを写した写真（日本在住東洋男性）にも小さなお堂と一緒に写し込まれている。もし石塔やお堂がなければ、これらの写真は撮られていなかった可能性がある。こうした自然と文化が不可分に混じり合った風景は国東半島・宇佐地域独特の大きな財産であることが明らかである。今後これら風景をどう保全していけるか、世界農業遺産においても大きな課題となる。

「5. 土地と景観」は、FAO が指摘する「5. Landscapes and seascapes features」に相当するものである。これ

はFAO内でGIAHSを管轄するセクションが「土地・水資源部」であるため、その観点からも評価するものであるが、そのため若干分かりにくい項目ではある。ここでは第3番目の項目を知識や技術といったソフト面（動産）での評価とするのに対し、こちらは水利システムや優れた文化的景観といったハード面（不動産）として捉えておこう。この項目に関する外国人たちの投稿としては、お堂など人工物が写っていない山並み（韓国など）や、海岸の風景（日系デンマーク人）、鬱蒼とした林の立ち並び（香港）、河川と紅葉（英国）などが見つかった。また、単なる道（小道や山道）を写している者も多く、世界遺産が道で登録されているものがあることに留意すれば（欧州の巡礼路や日本の熊野古道）、なにげないただの生活道も、外国人からは物珍しくみえることがあることがうかがえる。上図はタイ人が武蔵町の溜池に目をとめ撮影したものだが、彼女はこの他にもなにげない小道も撮影している。溜池システムを誇りとする国東半島・宇佐地域だが、外国人が溜池を撮影したものは今回この1枚しか見つからなかった。「簡単だからってだけで簡単なことをするのは良くないから」というコメントは意味深だが、彼女がこの溜池を築き管理することが簡単なことでないことを知ってそう書き込んだかどうかは分からない。しかしそれでも世界中の人が各々の人生のタイミングにおいて人生の労苦を国東半島・宇佐地域の人たちのそれに重ね合わせ、この地で物思いに耽ることは意義あることだろう（このことは小課題1-1ですでに述べた）。

今回これら5つの構成要素に含まれないと思われたものは「その他」へ分類した。具体的には、型染めを学びに来たインドネシア人、横岳自然公園（香港）、ガラス模様（国際結婚西洋男性）、老婆の顔（アメリカ）などである。

（4）まとめと提言

本節では、国東半島・宇佐地域世界農業遺産が今後世界へ対して情報発信していく上での戦略を練るために、2つの調査分析を行なった。一つは現在すでに行なわれているウォーキングイベントに参加したり宿泊施設に泊まったりして、外国人からみた好まれる点や好まれない点を探ることであった。そしてもう一つは、インターネット上のSNSにあげられている国東半島・宇佐地域の情報を収集分析することで、外国人たちがどのような風景に目を奪われているかを探ることであった。

前者においては、雨天時やトイレの心配といった、日本人旅行者と同じ問題が基本的にはあげられながらも、うっかりすると相手も日本人と同じように喜ぶだろうと期待してしまいような問題点がいくつか外国人たちから指摘された。たとえば温泉やお弁当、お冷やなどである。もちろん主催者はこちら側であるので完全に相手に合わせる必要までではないが、それでも遠くはるばる海外から来てくれた訪問客たちにはできる限り喜んでもらい、できればその良さをSNSで世界へ伝えてもらえれば、自分たちが世界へ直接喧伝する労力よりはるかに望ましいことになるだろう。また、そうした国東半島・宇佐地域の魅力は、なにも一見して明らかに日本風のものでなければならぬとは限らず、むしろなにげない普通の食生活であったり、生活習

慣であったりすることも分かった。等身大で、自然体の暮らしがなによりも国東半島・宇佐地域の財産であると言えるだろう。なお、WiFi と並んで外国人旅行者たちの主な心配ごとである公共交通機関の問題について出てこなかったのは、彼らが今回、日本人の運転するレンタカーで移動できたためである。これは改めてデータを取るなど別の調査が必要であろう。

後者においては、FAO が指摘する 5 つの構成要素のうち、外国人旅行者が最も多く魅力的に見えるものは農文化であり、また伝統知識に対しては逆に目になかなか見えていないことが投稿写真の分析から分かった。写真はいずれも説明を受けなくとも外から分かるものたちであり、逆に言えば解説を受けてより理解を深めれば撮影される対象が変わってくる可能性はある。このことは前項において「日本語の解説しかない」という外国人からの指摘とも連携してくる部分である。また、投稿タグが錯乱している（スペルミスも含めて）のは、地元側から逆に適当なタグの提示がなされていないことを示すもので、たとえば「何々というタグをつけて投稿して下さい」と促す試みはすでに多くの自治体や観光団体によってなされている（観光パンフレットなどに印刷されており、投稿者のなかから優秀者にプレゼントが貰えるなどのイベントになっている）。本文で述べたように、昨今の旅行者たちは SNS で見たことのある、有名なスポットへ行くことを旅の目的として、記念スタンプを押すようにそこで撮影して SNS へアップロードすることが一つの流れとなっている。そうとなれば、そうした撮影場所を、すでに地元が持っている魅力を傷つけない形で、さりげなく用意する戦略が有効となろう。それは食糧でも、生物多様性でも、伝統知識でも、農文化でも、景観でも、いずれでも準備することが可能である。各々の項目においてどんな情報を発信できるのか、時代に合わせて地元の人々で話し合い、出し合うことが有意義だろう。なぜならそれは、国東半島・宇佐地域を訪れる人たちだけでなく、地元の人たちにとっても懐かしく、楽しい話し合いになると期待されるからである。

小課題 2：トレイルの持つ多面的な経済的価値評価

九州大学農学研究院 講師 野村 久子
教授 矢部 光保

概要（小課題 2-1）

小課題 2-1 では、国東半島・宇佐地域世界農業遺産の 5 つの構成要素である「文化的景観、伝統的農業、農文化、食、生物多様性」といった多様な価値が存在するトレイルを経済的に評価し、この研究により一般の人々がトレイルに認めている価値を明らかにする。そして、その結果に基づいて、フットパスを含む地元の資源利活用、そして維持・継承のための方策を提案することである。そこで、維持・継承の活動支援としてウォークの際に募金あるいはボランティアを募ることとし、GIAHS 関連の活動に対する潜在的な支援の可能性を検討した。調査地域は、国東市国東町旭日地区、富来区を対象に、それらの地区における一般のウォーキングイベント参加者を対象にトレイルの持つ価値をアンケート評価した。まず、「世界農業遺産の維持・継承のための活動について、寄付やボランティアなどで支援したいと思いますか。」という問いかけに対し、およそ 80% の回答者が支援をしたいと答えた。そのうち、寄付を通じた支援を行っても良いと答えた人は 36.8% だったのに比べ、ボランティアを通じた支援を行っても良いと答えた人は、65.6% と、より多かった。ボランティアを通じた支援をしてもよいと答えた人は、ウォーキング参加者のおよそ 3 分の 2 であり、国東半島宇佐地域では、いろいろな形の農業遺産維持継承の取り組みが有用と考える。これにより、公的な支援のみでなく、利用者など便益を受けるものが支払う、あるいはボランティアという形で世界農業遺産の維持・継承のための活動にかかわっていくといった形など複数の取り組みを同時に行うことが、効果的な保全対策の策定であることが示された。

概要（小課題 2-2）

小課題 2-2 では、世界農業遺産の要素である生物多様性や農文化の保全活動支援として、「世界農業遺産 生物多様性・農文化保全基金」（仮称）を設定し、世界遺産認定地域を生息地とする生物多様性保全活動や農伝統・農文化保全活動等に対する非補助金型の支援策の検討を行う。これは、費用の一部を基金から支出することで、行政と市民が共同して保全活動を支援する新しい形での、市民参加型保全活動に資する。今回の調査から、ウォーキングイベントの際に、参加する人に、展示会のイベント手伝いなどを呼びかけるなどをしていくことで潜在的な協力が得られる人たちがおり、支援が可能ということが分かった。このことは、農業遺産の維持継承のための一活動として取り上げた七島イ振興協会の事務局の方が話されていた、資金ではなく人を巻き込んでいくことで生み出されていく活力の方が有り難いという話にもつながる。今回の調査で明らかになったボランティアの潜在的な存在を今後世界農業遺産の維持・継承活動とマッチングさせていくことで、地域の活動に内外の人々を巻き込んでいけるだろう。

(1) 研究目的

小課題2の研究目的は、国東半島のトレイルの活用現状を明らかにし、それを踏まえてフットパスを含む地元の資源利活用、そして維持・継承のための方策を提案することである。そこで、維持・継承の活動支援としてウォークの際に募金あるいはボランティアを募ることとし、GIAHS 関連の活動に対する潜在的な支援の可能性を検討した。

(2) 研究背景

国東半島の世界農業遺産は人々の営みによって維持・継承されている。その遺産の構成要素がちりばめられている国東半島のトレイルは、歩きながら健康が得られるだけでなく、それぞれの遺産要素について学ことができる貴重な体験ができる場所である。それを踏まえ、棚田の田植え、七島イの収穫作業やその加工品販売、ウォーキングコースの草刈りなど、世界農業遺産の維持・継承のための活動が継続されることがそのままトレイルの価値にもつながってくる。

そこで、まず今回の調査対象となった支援活動について紹介する。まず、密乗院の棚田は国東ロングトレイルコースの一部にもなっているが、棚田だったところが植林されたり、放棄地が発生したりしたところを、農家の自助努力で棚田の景観を守る活動を行っている。現在、棚田維持のために週末国東の外に出ている村出身の若者が戻ってきて棚田の復元あるいは維持作業を行っている。保全活動を行っていることから募金箱は設置されているものの、募金額はわずかである。



(写真3 密乗院の棚田) (国東市観光課 提供)

また、七島イは、小課題1で書かれているように畳の原料として、国東半島で盛んに栽培されかつては国東半島の一大産業であった。しかしながら、輸入物の井草が大量に入るようになって以来、現在は、以前ほど栽培されていないものの、複数の農家が今でも栽培を行っている。やはりウォーキングでは、ため池からの水を水のない地区に回す代わりに、その地区の浜辺で七島イを乾かせるように相互互助の関係が成り立っていた話など、七島イ生産最盛期当時の話が出る。国東半島の伝統農工芸品の維持・継承について、七島イ振興会にヒヤリングを行ったところ、お金が必要なのでなくやはり七島イを用いた伝統農工芸品を残していこうという機運が高まる必要があるということであった。そのためにも、人のかかわり(活力)がほしいとコメントがあり、新商品の販売ボランティアでもいいし、七島イの収穫ボランティアでもいいのでボランティアが入ってくれることで世界農業遺産が活性化できるという話があった。そこで今回は、七島イの振興活動支援を世界農業遺産の支援活動の1つとしてアンケートに入れるとともに、募金のみでなくボランティアについて質問することとした。



(写真4 七島イを浜辺で干している様子) (国東市観光課 提供)

3つ目の支援活動であるウォーキングコースの維持管理は、現在ウォーキングイベントを行っている地区あるいは、国東半島峯道トレイルクラブによって担われている。地区レベルでイベントを行っている旭日地区では、GIAHS ASAHI Project (GAP)を立ち上げた。旭日地区内に独自のウォーキングコースを設置し、GAPが年に複数回ウォーキングイベントも行っている。

また、富来区では、学校が廃校になったことを機に、地域おこし協議会「文溪里の会」を設

立した。かつての小学校は、昔からその地区で使われてきた七島イや米生産の農工具、家具などを展示する博物館に生まれ変わっている。毎年春と秋に2回世界農業遺産と名跡をめぐるウォーキングを行っており、やはりウォーキング前には地区の人たちが草刈りなどを行い、当日は参加者にお昼ご飯をもてなす活動を行っている。

また、国東半島峯道トレイルクラブは、2013年4月に発足したNPOで、トレイルの管理整備も行っている。会員は40人で、ガイドトレーニングもしており、トレイルを歩くときには、このクラブのメンバーがガイドの役割を担っている。2013年時点で2コースだったのを、2014年12月には10コースに増やした。そして、トレイルはA地点からB地点まで弓なりにあり、全長135KMあり、それを10コースに区切っている。かれらは、旅行会社が企画するトレイルツアーなどのガイドを務めるが、トレイルの草刈りなどはボランティアで行っている。



(写真4 トレイルを整備している様子) (国東市観光課 提供)

(3) 調査概要

本課題は、GIAHS 活動の維持・継承のための支援可能性の高いウォークの参加者を対象に、寄付する、あるいはボランティアで支援してもよいとする活動支援内容と、その度合いを調べるため、アンケート調査を行った。アンケートは、10月30日開催の国東町旭日地区（主催：世界農業遺産旭日プロジェクト事務局）、11月13日開催の富来（主催：地域起こし協議会・文溪里の会）、そして、12月3日開催の富来と12月4日開催の国東市武蔵町麻田（主催：み仏の

里くにさきウォーキング大会事務局) のウォークイベントの際に参加者を対象に行い、有効回答数は、152であった。



(写真) アンケート票をウォーキング後、参加者に説明している様子

アンケートの内容は、①活動支援について選択肢あり、②密乗院の棚田保全支援のみ、③七島イ振興活動支援のみ、④ウォーキングコースの維持管理支援のみ の4つのバージョンを準備した。また、配布数は、それぞれ、①69(45.39%)、②28(18.42%)、③27(17.76%)④28(18.42%)である。

①活動支援について選択肢あり	69 (45.39%)
②密乗院の棚田保全支援のみ	28 (18.42%)
③七島イ振興活動支援のみ	27 (17.76%)
④ウォーキングコースの維持管理支援のみ	28 (18.42%)
計	152 (100%)

図 1 支援内容別質問票の配布数

(4) 調査結果

以下では、まず、調査結果を単純集計およびクロス集計で示していく。

1) GIAHS についての知識

トレイルの持つ多面的な経済的価値評価を行なうにあたり、トレイルの魅力ともいえる世界農業遺産の要素である「文化的景観、伝統的農業、農文化、食、生物多様性」といった多面的な構成要素が数多く存在することを、参加者がどのくらい認識しているかどうかで価値評価が異なってくると考えられる。このため、まず、設問で、「トレイル世界農業遺産は、「文化的景観、伝統的農業、農文化、食、生物多様性」の5つの要素で構成されています。このことをご存知でしたか。」という質問を行った。結果、よく知っていたは25%であり、なんとなく知っていたの58.55%を含めると、およそ84%のウォーキングイベント参加者が農業遺産の構成要素を理解していた。ウォーキングイベントに世界農業遺産という言葉が入っているため事前にある程度の知識を持った人が参加していることが分かった。一方で、15.79%の参加者は世界農業遺産の構成要素までは把握していなかった。これら25.79%の回答者は、GIAHSの構成要素などを知らないために、どのような対象を農業遺産として維持・継承していくべきなのか、保全対象が漠然としているともいえる。

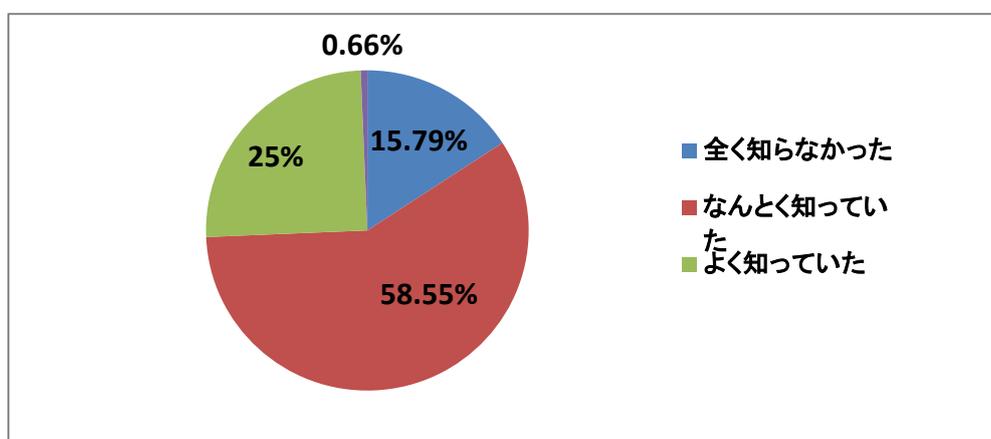


図 2 世界農業遺産の構成要素についての知識

このように世界農業遺産に対する知識が高かった理由として、ウォーキングでは、ウォーキング開催地区出身のガイドが道を案内する。その際に、国東半島宇佐地域世界農業遺産の構成要素であるため池やしいたけのほだ場を案内し、また、その伝統農業が国東半島で形成された歴史的背景などを話していく。そのため、文化的景観を味わいながら、伝統的農業を学び、農文

化や食、生物多様性といったものに触れる機会がある。ウォーキングは座学と異なり、野外で歩きながら、五感で感じながら国東半島宇佐地域の持つ世界農業遺産の価値を学ぶことが利点である。このようなウォーキングを通じた体験により、世界農業遺産の価値、そしてその維持・継承の必要性をアピールすることは有効であるといえる。



(写真2 ため池で地元ガイドの説明を聞く参加者)

2) 世界農業遺産への支援

次に、伝統農業システムの維持・継承に対して何らかの支援をしたいと思うか質問した。具体的には、質問項目として、「世界農業遺産の目的は、その価値や知識、文化を次世代に継承することにあります。しかし、国東半島の世界農業遺産は人々の営みによって維持・継承されているため、何もしなければ荒廃していきます。そこで、仮に、棚田の田植え、七島イの収穫作業やその加工品販売、ウォーキングコースの草刈りなど、世界農業遺産の維持・継承のための活動について、地元の団体や市民等が取り組んで行くとしたら、その場合、あなたは、このような活動を、寄付やボランティアなどで支援したいと思いませんか。」という問いかけに対し、およそ 80%の回答者が支援をしたいと答えた (図3)。

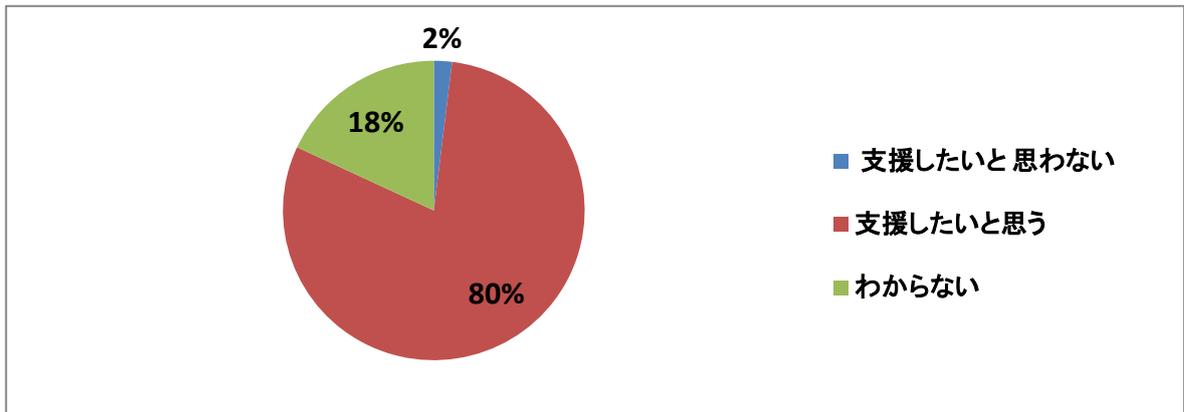


図 3 世界農業遺産の維持・継承のための活動を支援したいですか

3) 支援内容について

そして、支援したいと思うと答えた回答者に対して、仮に、支援活動として、①密乗院の棚田保全、②七島イ振興活動、③ウォーキングコースの維持管理、があるとします。あなたは、どの活動を支援したいですかという問いをした。結果、支援したい内容として29.2%の人が棚田の田植えを、31.4%の人が七島イの収穫作業やその加工品販売を、48.2%の人がウォーキングコースの草刈りを支援したいという結果（複数回答可）となった（図4）。これは、ウォークイベント参加者全体のうち40%の人が寄付やボランティアなどでウォーキングコースの草刈りを支援したいという結果を示している。

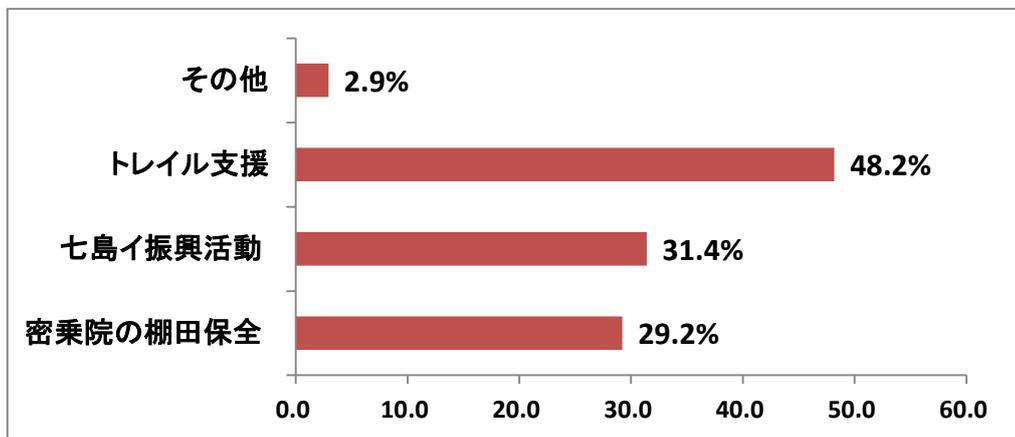


図 4 支援対象とする活動の内容について

4) 支援手段について

また、支援するとした回答者のうち、22.4%の人が寄付、51.2%がボランティア、そして、14.4%の人が寄付とボランティアの両方で支援を行っても良いという回答を得た（図 5）。両方による支援と答えた人を含めると、寄付を通じた支援を行っても良いと答えた人は、36.8%、そしてボランティアを通じた支援を行っても良いと答えた人は、65.6%であった。ボランティアを通じた支援をしてもよいと答えた人は、ウォーキング参加者のおよそ三分の二に上り、ボランティアを行うことに対する抵抗は少ないと言える。

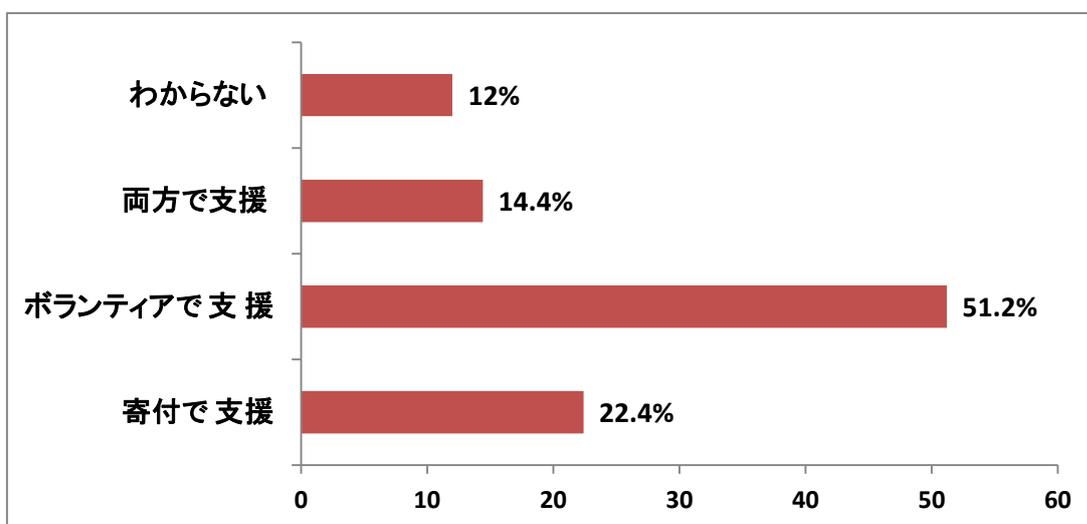


図 5 どのような活動支援方法で支援したいですか

5) 各支援活動への支援方法

次に回答者が支持した各支援活動ごとの支援方法についてみていく。密乗院の棚田保全支援活動では、47%の回答者が寄付による支援、62%の回答者がボランティアによる支援をしてもよいとしたのに対し、②七島イ振興活動では、寄付による支援は31%と減り、一方で、ボランティアによる支援が72%と増加した。また、ウォーキングコースの維持管理でも同様の傾向となり、寄付による支援は31%と低い一方で、ボランティアによる支援が73%と高かった。これは必ずしも金銭での募金ではなく、ボランティアによる時間を提供することで活動を支援していきたいと考える人が特に七島イ振興活動やトレイルの維持管理を支援する人の中に多いということが分かった。では、次に各支援活動に対してどのくらいの寄付とボランティアによる支援を行ってもよいと考えているのか見ていくことにする。

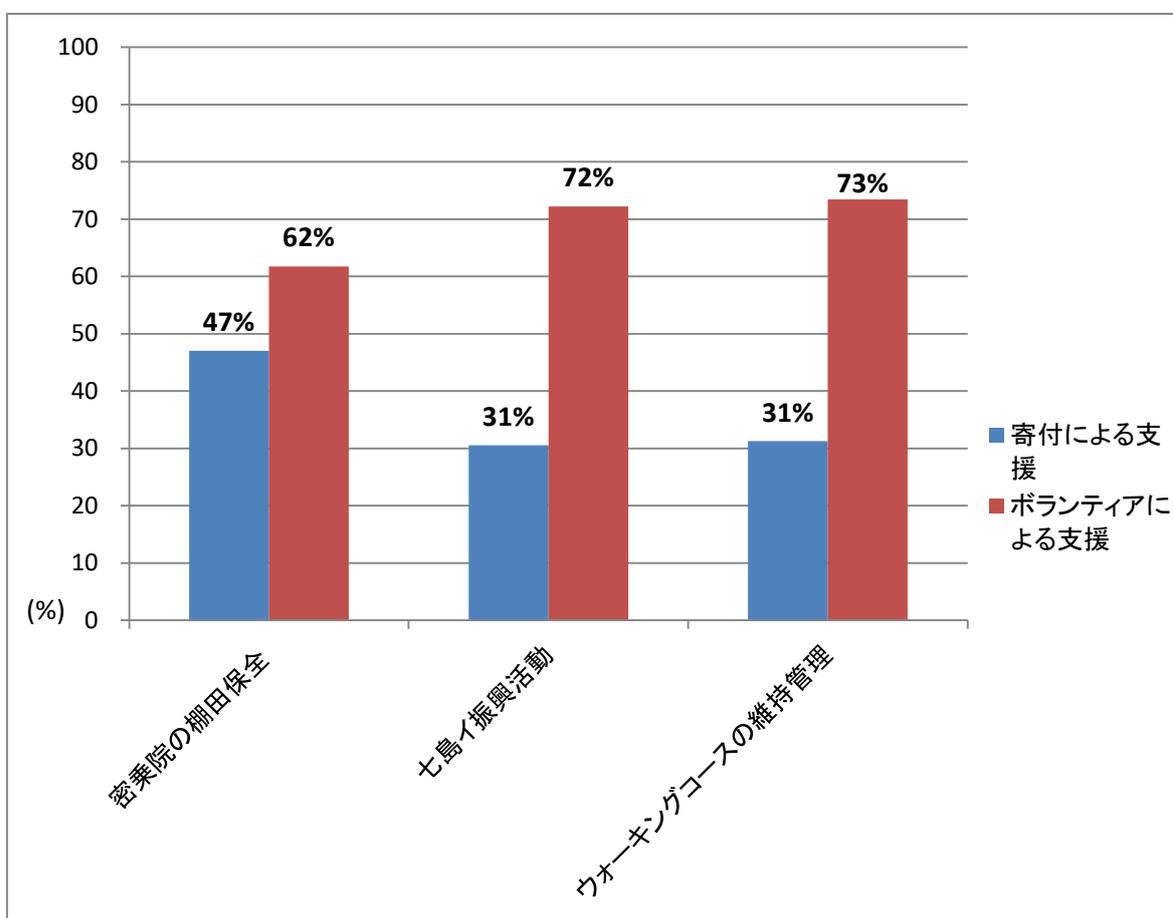


図 6 各支援活動への支援方法

6) 寄付を通じた支援

次にそれぞれの支援活動に対する支払意思額を見ていくことにする。具体的には、寄付を通じた支援について「**問4で「寄付で支援」と答えた方にお伺いします。1回のウォークイベント参加につき、いくらまでなら寄付してもよいと思いますか。**」という質問を行った。回答は、棚田の田植え、七島イの収穫作業やその加工品販売、ウォーキングコースの草刈りへの支払意思額は、それぞれ平均で、726円、625円、816円であった（別添 図4）。ウォーキングコースの草刈りに一番多く支払ってもよいと思っている人が多いことは、参加者が自分たちが参加するウォーキングを通じて、事前にイベント地域の住民が草刈りなどを行っていることを実感し、またそれに対する評価が高い結果と考えられる。

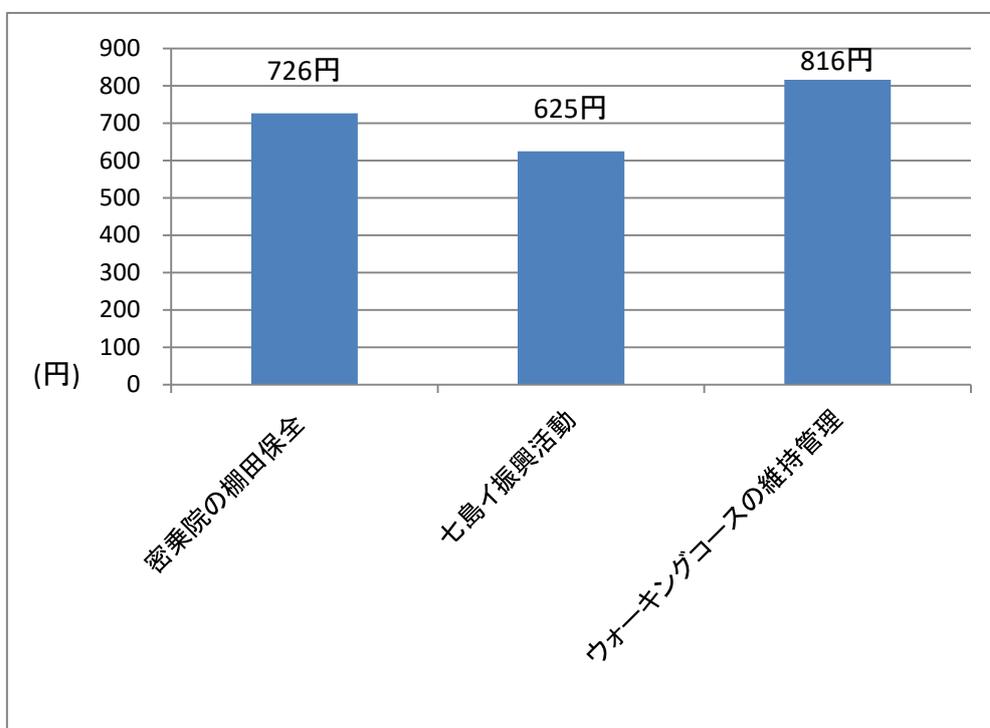


図 7 寄付を通じた支援

7) ボランティアを通じた支援

そして、ボランティアを通じた支援について次のように質問した。「**問 4 で「ボランティアで支援」と答えた方**にお伺いします。**ボランティア支援活動に年間、何日くらいであれば、参加してもよい**と思いますか。」という問いかけに対し、結果は次のとおりである。興味深いのは、ボランティアによる支援活動が可能と答えた人は、国東半島の参加者は、年間平均4.22日に対し、国東半島以外の参加者は、年間平均が2.47日であった。国東半島で、ウォーキングに参加する人々は、国東半島の持つ農業遺産をボランティアを通じて支援したいという意思が大きいことを示している。人のつながりは、地域に活気を与える。このような潜在的なボランティアが存在することは、今後ボランティアの募り方次第で、地区の人のみならず、国東のほかの地区の人々も動員して活動を行うことが出来ることを提示しているといえる。

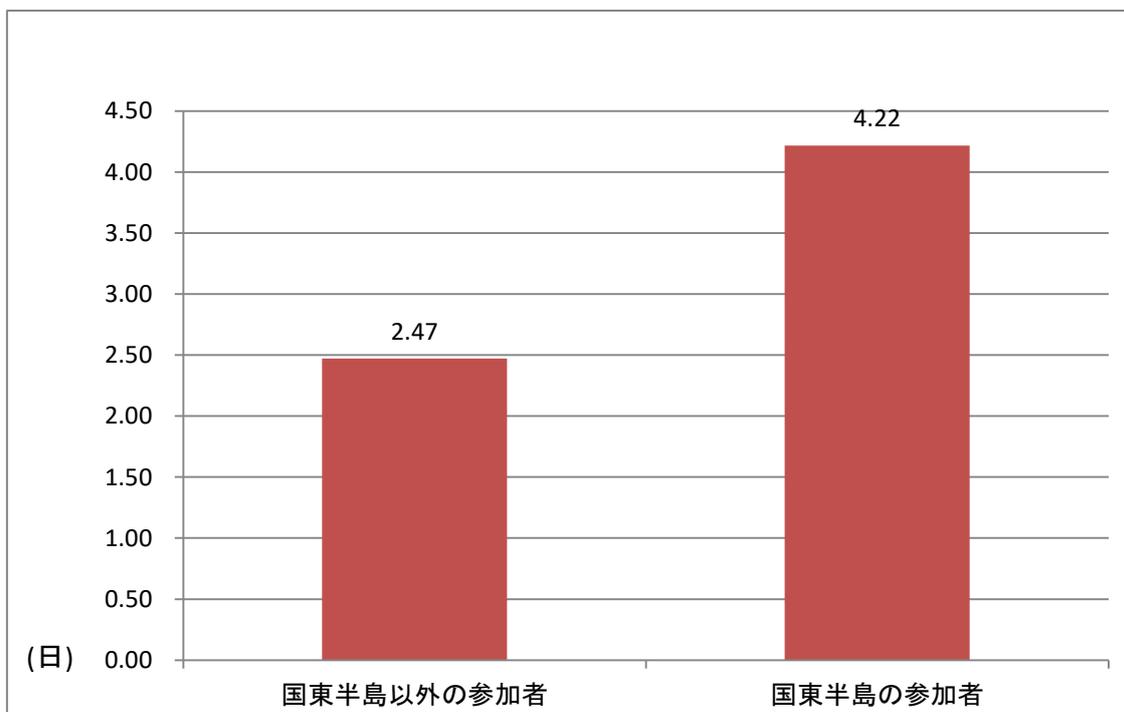


図 8 ボランティアを通じた支援

次に、棚田の田植え、七島イの収穫作業やその加工品販売、ウォーキングコースの草刈り、それぞれの活動へのボランティアを通じた支援は、国東半島からの参加者と国東半島以外の参加者で異なっていた。それぞれの活動について、棚田の場合、国東半島からの参加者よりも国東半島以外の参加者のボランティア希望が4.07と多かったのに比べ、七島イの収穫作業やその加工品販売では、半島内外のボランティア日数はそれぞれ3.92日、3.82日とそれほど変わらなかった。これは、棚田のような支援は、半島外の人あまりそのような作業に従事したことがないことから関心が高いためといえる。しかしながら、棚田については半島内外の参加者による統計的有意差はなかった。一方、ウォーキングコースの草刈りのボランティアは、半島内からは、4.14日だったのに比べ、半島以外の参加者は3.09日と少なかった。これより、統計的な有意差をもって、(P値<0.10)、半島内からの参加者のほうがボランティア日数が多かった。これは、半島内の参加者にウォーキングイベントの際に、ボランティア活動日や具体的な分担作業などを周知することで、ボランティア活動に参加してくれるウォーキング参加者を募ること可能性を示している。

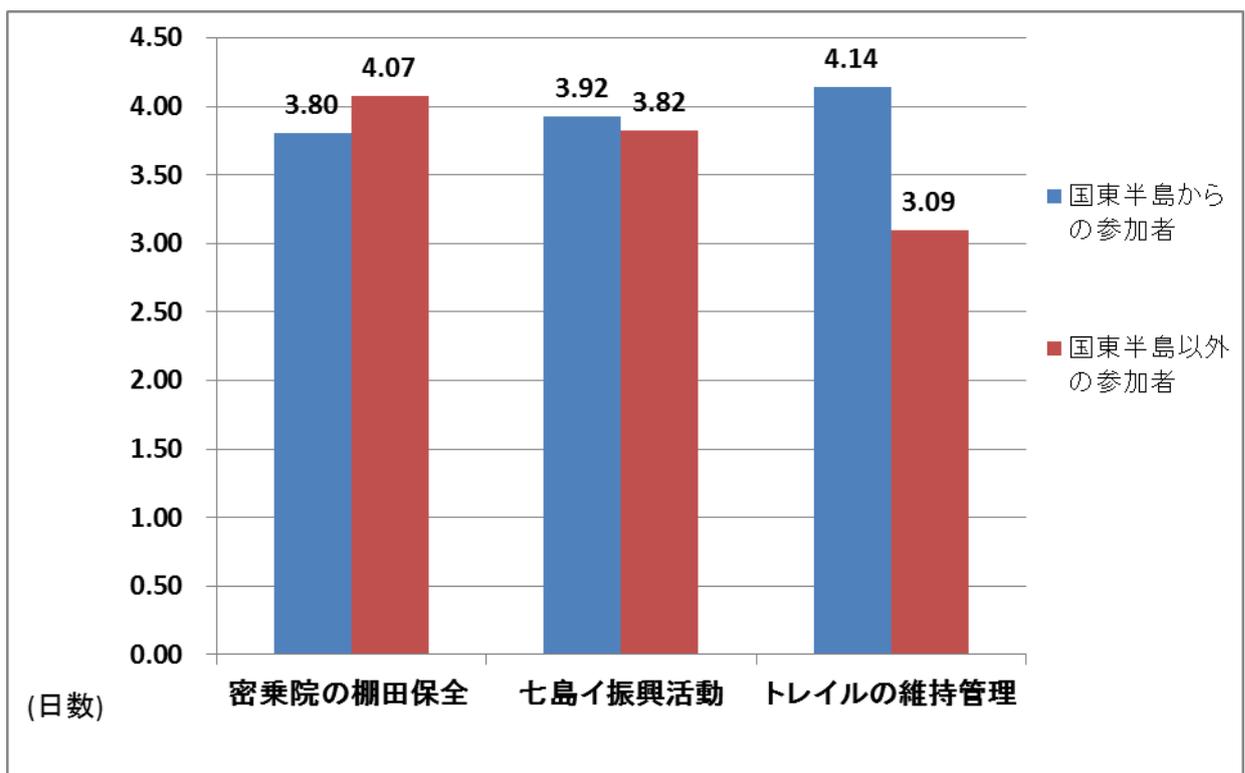


図 9 国東半島内外からのボランティアによる支援

8) 「支援したいと思う」を選ばなかった理由について

なお、「支援したいと思う」を選ばなかった回答者に、その理由を尋ねたところ、「国東半島の農業遺産の維持・継承は、寄付・ボランティア以外の方法で行われるべき」11人、「このような活動は信頼できない」1人、「このような活動には関心がない」1人、「関心はあるが、他の人が支援してくれるなら自分が支援するまでもない」1人となった。よって、これらの回答票は、抵抗バイアスがかかるため、分析からは外している。確かに、「国東半島の農業遺産の維持・継承は、寄付・ボランティア以外の方法で行われるべき」という理由は、国東に限らず1つの議論として存在する。その議論は、公のものを守っていくためには、公の予算でということとつながる。一方で、それに任せておいて成り立っていくのかという議論があり、便益を直接あるいは間接的に受ける人が、彼らがそれらの対象に対して持つ支払意思額あるいはそれに対する労働による貢献という形で守っていくことも、公で守っていくことと同時にやっていく必要がある。

国東半島の農業遺産の維持・継承は、寄付・ボランティア以外の方法で行われるべき	11
このような活動は信頼できない	1
このような活動には関心がない	1
関心はあるが、他の人が支援してくれるなら、自分が支援するまでもない	7
これだけの情報では判断できない	15

図 10 支援をしないとした理由

9) 支援活動内容別にみた寄付支援とボランティア支援割合

最後に、それぞれの支援活動内容別に寄付支援とボランティア支援で見ていく(別添 図6)。棚田の支援には、寄付を通じた支援は44%、ボランティアを通じた支援は53%とそれほど支援方法の違いに支援の割合が変わらなかった。一方、七島イの支援には、寄付を通じた支援は28%、ボランティアを通じた支援は67%であった。七島イの維持・継承関連活動は、ボランティアを通じた支援のほうが寄付を通じた支援よりもより賛同を得られやすいことが分かった。同様に、ウォーキングの支援でも、寄付を通じた支援は26%だったのに対し、ボランティアを通じた支援は61%であった。ウォーキングコースの維持支援についても、ボランティアを通じた支援のほうが寄付を通じた支援よりもより賛同を得られやすいことが分かった。これらは、今後それぞれの活動を支援する方策を展開するにあたり、ボランティアが入ることで世界農業遺産の地域の活動が活発化する可能性があると考えられる。

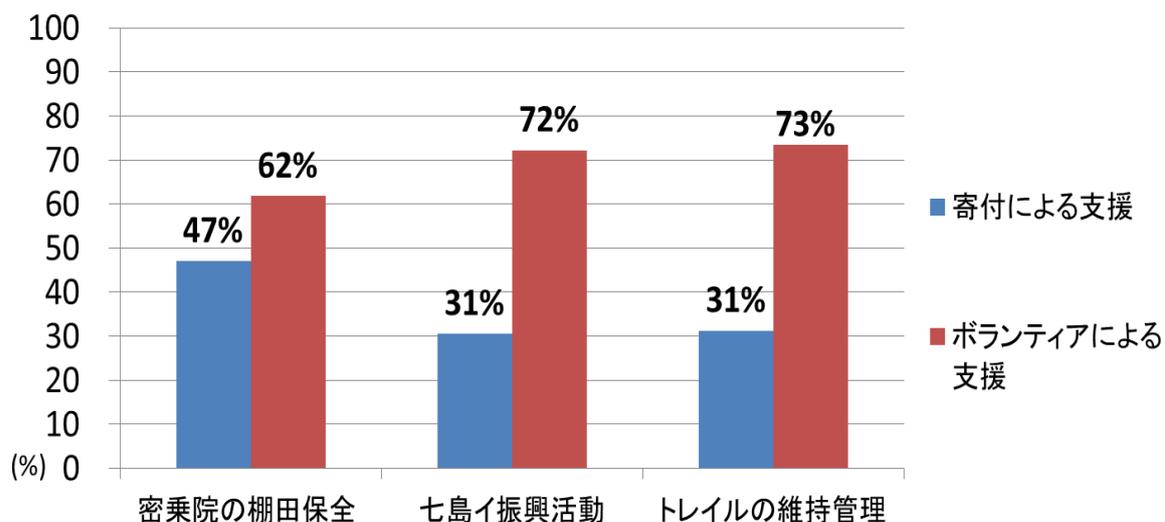


図 11 支援活動内容別にみた寄付支援とボランティア支援割合



(写真5：国東町富来区ウォーキング 2016年11月)

(4) まとめと提言

本項の目的は、国東半島のトレイルの活用現状を明らかにし、それを踏まえてフットパスを含む地元の資源利活用、そして維持・継承のための方策を提案することであった。そこで、維持・継承の活動支援としてウォークの際に募金あるいはボランティアを募ることとし、GIAHS関連の活動に対する潜在的な支援の可能性を検討した。

具体的には、国東半島・宇佐地域世界農業遺産の5つの構成要素である「文化的景観、伝統的農業、農文化、食、生物多様性」といった多様な価値が存在するトレイルを経済的に評価し、この研究により一般の人々がトレイルに認めている価値を明らかにする。そして、その結果に基づいて、効果的な保全対策の策定を検討した。

調査地域は、国東市国東町旭日地区、富来区を対象に、それらの地区における一般のウォーキングイベント参加者を対象にトレイルの持つ価値をアンケート評価した。結果、ウォーキングイベント参加者の80%が何らかの形で新してもよいと答えた。しかしながら、現在国東半島のロングトレイルあるいはウォーキングイベントを企画しているまた、聞き取りをした際に、どの活動団体からも募金をすることに積極的でない感触が得られた。よって、寄付金でなく、ボランティアで支援活動に参加するという質問をおこなった。結果、より多くの方が募金よりもボランティアを通じた支援活動のほうがより支援をしたい方法であるという回答が得られた。これは、活動の取り組み例として挙げた棚田と七島イ、そしてウォーキングイベントでも同様の結果が得られ、ボランティアによる活動支援意思率が募金による活動支援意思率よりも

より多かった。この質問をいれた理由として、基金に募金する額は仮に少なくなっても、ボランティアの需要がわかれば国東市としてもこの研究結果を受けて、棚田のボランティアなり、七島イなり、草刈りなりとボランティアを募集する展開が生まれる可能性を提示したいと考えたことが挙げられる。また、この結果は、今後それぞれの活動を支援する方策を展開するにあたり、ボランティアが入ることで世界農業遺産の地域の活動が活発化する可能性があると考えられる。もちろん、周知の方法や、ボランティアが参加したいと思っている支援活動の内容の精査、そしてマッチングは必要であることから、地元の方々の検討と今後の展開に期待したい。

そして、支援したいと思うと答えた回答者に対して、仮に、支援活動として、①密乗院の棚田保全、②七島イ振興活動、③ウォーキングコースの維持管理、があるとします。あなたは、どの活動を支援したいですかという問いをした。支援したい内容として 29.2%の人が棚田の田植えを、31.4%の人が七島イの収穫作業やその加工品販売を、48.2%の人がウォーキングコースの草刈りを支援したいという結果（複数回答可）となった。これは、ウォークイベント参加者全体のうち 48.2%の人が寄付やボランティアなどでウォーキングコースの草刈りを支援したいという結果を示している。やはり、ウォーキングに参加している人を対象にしたことから、支援したい活動は、ウォーキングコースの管理への支援活動であった。今後は、トレイルの維持・継承も含めて現地の関係者の話し合いが進められる必要がある。ウォーキング前の2、3週間前に行われる草刈りなどは地区の方々のウォーキングルートあるいはトレイル管理への無償の貢献である。現在のところは、旭日地区の GAP そして富来区の地域起こし協議会・文溪里の会が積極的に行っている草刈りも、しっかりとボランティアを今から活動に組み込んでいくことが、持続可能な活動の形につなげていくためにも望ましい。

最後に、棚田の田植え、七島イの収穫作業やその加工品販売、ウォーキングコースの草刈りへの支払意思額は、それぞれ平均で、726 円、625 円、816 円であった。この支払意思額は、「寄付で支援」と答えた方にお伺いし、1 回のウォークイベント参加につき、いくらまでなら寄付してもよいと思うか答えていただいた。ウォーキングコースの草刈りに一番多く支払ってもよいと思っている人が多いことは、参加者が自分たちが参加するウォーキングを通じて、事前にイベント地域の住民が草刈りなどを行っていることを実感し、またそれに対する評価が高い結果と考えられる。1 回のウォークイベント参加が現在 1000 円程度である。しかし、この参加費で、保険からお昼代をだしている。例えば、告知パンフレットなどの準備費やお昼代の一部などは、助成金で賄われている。しかし、今後も助成金が継続してこれらの地区に支給されるかはわからない。ほかのウォーキングと足並みをそろえて 1000 円にしている部分もある。実際は、トレイル管理の草刈りの際にかかる費用を考えると赤字になっているところも多いであろう。しかし、今回の調査でわかったことは、ウォーキングイベント参加者の 80%が支援してもよいと考え、そのうちの 48.2%がウォーキングコースの草刈りを支援してもよいと答え、支払意思額として 1 回のウォーキングイベント参加につき 816 円支払いをしてもよいと答えている。無理なく継続して地区で行える行事にするためにも、支払意思額を参加費に組み込んで 1 回 1800 円くらいでも十分楽しかったと思えるウォーキングイベントであると参加者が思っていることを認

識し、参加費を値上げしていくことを検討してもよいと考える。

今回の調査では、公的な支援のみでなく、利用者など便益を受けるものが支払う、あるいはボランティアという形で世界農業遺産の維持・継承のための活動にかかわっていくといった形など複数の取り組みを同時に行うことが大事であることが提示された。具体的には、ウォーキングイベントの際に、参加する人に、展示会のイベント手伝いなどを呼びかけるなどをしていくことで潜在的な協力が得られる人たちがおり、支援が可能ということが分かった。このことは、農業遺産の維持継承のための一活動として取り上げた七島イ振興協会の事務局の方が話されていた、資金ではなく人を巻き込んでいくことで生み出されていく活力の方が有り難いという話にもつながる。今回の調査で明らかになったボランティアの潜在的存在を今後世界農業遺産の維持・継承活動とマッチングさせていくことで、地域の活動に内外の人々を巻き込んでいけるだろう。このようなことは、各地区ごとあるいはトレイルクラブだけでできることではないため、今後、国東市とともに各団体との話し合いを設け、世界農業遺産の維持・継承のためにどのようにボランティアや寄付金を組み込んでいけるか検討が行われることが期待される。

中間報告会で出された要望・意見に対する回答

(1) 有効性の検証について

「国東半島には独特の歴史・背景が色々あり、昔の人が苦勞して神様を祀ってきた。有効なストーリーがないということだが、有効性の検証をしてもらいたい」

上記要望・意見に対して、2点回答を申し上げたい。

まず1点目は、中間報告会で申し上げた「ない」という内容は、国東半島の独特な歴史・背景ではなく、その「物語性」である。いうまでもなく国東半島・宇佐地域はわが国における地域のなかでも十分に色濃い独特の歴史・背景を有しているが、世界農業遺産での情報発信においては、それが物語＝ストーリーとして充分に見えてはいない、という意味である。これは例えていえば、お爺さんお婆さんがおり、桃があり、桃太郎がいて、猿がいて犬がいてキジがいて、鬼や鬼が島も揃っているが、それらをつなぐストーリーがないのと同じである。来訪者たちは、ああ桃太郎がいるな、鬼がいるなで終わってしまい、それらの一連のつながりが見えない状況を示唆したもので、決して鬼や桃太郎がいないことを批判したものではない。逆にいえば、ストーリーさえあれば、それら魅力的な要素要素がつながり、生き活きと動き出す。

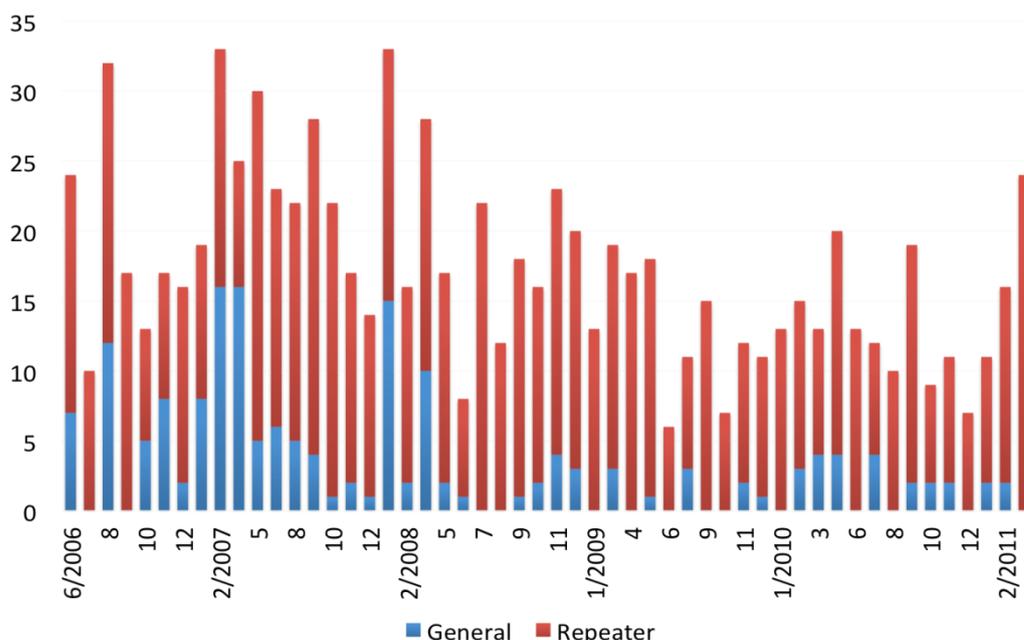
これはちょうど、ユネスコが推進する世界ジオパークにおいても近年しきりに議論されている点である。ジオパークはいわば、誤解を恐れず言えば、世界農業遺産の地質版であるが、そこで養成されるジオガイドおよび整備されるジオツーリズムにおいて、来訪者たちに何を伝えるか喧々諤々とした議論が続いている。当初はジオパーク内にみられる貴重な地質遺産のみを説明していたが、聞きなれない専門用語を多用し、難しい地球科学の話をたどたどしく繰り返しているうちに、あっという間に来訪者たちに飽きられてしまった。ジオガイドが語る話に来訪者がさっぱりついていけず、またそもそも特に関心もなかったからである。これは本稿でいえば〈歴史的記述〉ばかりで〈感情移入的挿話〉がなかったからといえる。感情を移入する切り口がなかったために、ついで訪問客はその地域へ入れなかったのである。そのため現在ジオパークの業界では、貴重な地質遺産を単独でどくどく説明することは避け、それらをつないだジオストーリーの制作に力を入れるべきとの声が上がっている。そうした声を受けて新しく古今書院から発刊されたシリーズ本『シリーズ 大地の公園』全4巻には「ジオパークの魅力をジオストーリーで語る。地域を学べるフィールドガイド」と銘打たれている。国東半島・宇佐地域においては、姫島が「おおいた姫島ジオパーク」としてこのシリーズに収録されているので（目代邦康他編『九州・沖縄のジオパーク』、2016年6月）ぜひ参照されたい（なお、この文献の阿蘇ジオパーク担当は筆者である）。また、ジオパークにおけるジオストーリーの必要性については日本地理学会から発表された論文、柚洞一央・新名阿津子・梶原宏之・目代邦康「ジオパーク活動における地理学的視点の役割」E-journal GEO、9-1、pp.13～25、2014年4月も参照されたい。

もう少し専門的な話もすれば、昨今はストーリーのさらに先を行く次世代の概念として、ナラティブというキーワードもしきりに議論されている。これらはどちらも日本語に訳せば「物語」となってしまう区別がつかないため、現在は各々をカタカナ表記の英語で記している。ス

トリーとナラティブの違いは難しいが、例えていえば、来訪者が映画館でみるホラー映画がストーリー、お化け屋敷がナラティブに喩えられる。映画館で上映されるホラー映画はストーリーそのものであり、来訪者はそのレールの上から逃れることはできない。一方、お化け屋敷は来訪者が自ら進む方向を決められ、レールは1本ではない。来訪者の感覚にあわせて展開例はいくつかあり、エンディングも同じとは限らない。これは世界農業遺産でいえば、たったひと通りのストーリーしか提示しないのではなく、来訪者の人生スタイルにあわせていくつか提示できるナラティブを目指すべきだという考えになる。現実の社会においては、従来的一本道ストーリーからナラティブへ展開するコンピュータゲーム業界や、一人一人の患者の状況にあわせて多様な語りを採用する臨床心理のナラティブアプローチなどがそうした事例となる。ただ今回、国東半島・宇佐地域において一気にそこまでの議論は必要と思われなかったため論じなかったが、ストーリーの先にそうした議論もあることは見据えておいてよい。

2点目は、そうしたストーリーの有効性をどう判定できるかである。この課題は大変難しい。一般的に言えば、ストーリーが有効であることを言うためには、有効でないストーリーを言えねばならない。つまり、対照実験等が必要となる。たとえば、ストーリーを語ったときのウォーキングと、語らなかったときのウォーキングの参加者たちのアンケートの比較やヒアリング調査が必要となる。しかし理科室での自然科学的実験と違い、ストーリーを語らないウォーキングイベントをわざわざ開催するのも現実には難しい。そのため、もし検証が必要ならば別の方法を考えねばならない。

筆者が同じ世界農業遺産である熊本県阿蘇地域において行なっていたウォーキングイベントを事例として紹介したい。



阿蘇をさるく会 参加者数 (2006年6月～2011年3月)

上の図は、筆者が阿蘇地域において毎月第4日曜日の午前10時～正午に開催していたウォーキングイベント「阿蘇をさるく会」の参加者数を示したものである（調査期間は2006年6月～2011年3月までのおよそ5ヶ年間）。青色は一般参加者、赤色は博物館友の会会員による参加、つまり常連参加者を示す内訳である。調査期間中の参加者は総計896名、うち会員参加が699名、すなわち全体の78%がリピーターであった。毎月の平均参加者数は17.2名（雪や雨のため中止となった回も含む）である。このウォーキングイベントは、博物館学芸員がウォーキング地区において各々の要素をつなぎあわせたストーリーを案内するものであった。この図から推測されるのは、もしもそうした試みが参加者に受け入れられなければ、78%というリピート率は得られず、あっという間に参加者たちに飽きられて減少していただろう、ということである。もちろんそうした仮説を実証するためにはアンケート調査やヒアリング調査といった補助調査も必要だが、いずれにせよストーリーの有効性を検証するためには、こうした長い年月の動向調査も必要となる。それを実証するためには、毎回のウォーキングイベントの参加者データをきちんと保管しておくことが大切である。

(2) 新たなアピールポイントについて

「調査結果や報告書の内容が地域の活動や歴史的遺産などが対外的に発信できるような新たなアピールポイントとして、PRできるものになればよい」

上記要望・意見に対しては、次の(3)をハード面に関する要望・意見としたときの、こちらをソフト面に関するものとして、5点注意点を申し上げたい。

先ほど世界農業遺産に類する活動としてユネスコの世界ジオパークを述べたが、わが国においてはこうしたフィールドミュージアム的活動の原点は1990年代から始まったエコミュージアムまで遡る。もちろんそれまでも野外での活動は行なわれてきていたが、エコミュージアムが当時わが国の行政のみならず自然保護団体や商工観光関係者にまで幅広く注目されたのは、これまでのように地域に点在する貴重な資料を集めるのではなく、現地でそのまま保存し、来訪者が逆にそれらを回るという発想の転換があった。経済的バブルがはじけ、新しいハコモノをつくらなくても済むといった現実的な事情もあったが、貴重な地域資源を集めて博物館にするのではなく、貴重な地域資源は現地のままで、地域そのものを逆に博物館にするという発想はわが国では20世紀末に始まった。そういう意味ではエコミュージアムは当時最先端の「新たな」思想だったのである。九州地方においてはその後、別府市の「オンパク」や長崎市の「長崎さるく博」など、名称は各々でも底流する思想は同じ試みが次々と現れた。さらにその後、世界ジオパークが登場し、関連してユネスコのエコパークも見直され、そしていま世界農業遺産も出てきたいま、翻って当初のエコミュージアム業界を見渡すと、もうすでにその影は随分なりを潜めていることに驚かされる。当時あれだけ新たな活動としてもて囃されたエコミュージアムが、なぜたった20年で下火となったのかを考察しなければ、世界農業遺産も20年後同じ轍を踏むことになりかねない。そこでわが国のエコミュージアムにみられた5つの問題点についてふれておきたい。

まず1点目は、専門科学者との連携についてである。エコミュージアムにおいては、住民みずから地域社会について学習することが重視されており、生涯学習や社会教育学の方面から期待されていた試みであった。そのため、難しい話をする専門学芸員などは敬遠され、住民みずからが学習した内容が語られたりしていたのだが、それらが科学的に正しいのかどうかの検証が不明瞭であり、時には大変怪しい話を真面目に語る地元ガイドもいた。またそうした活動はいわば教員のいない学校における自習と同じであり、当初は活発に活動していた地域住民たちも、いつしか飽きて活動から離れていった。ジオパークにおいては、地質遺産という性格上すでに難しい話題を包含するため、当初から大学教員や専門研究者との良好な協力体制があり、地域社会にも大学学会にも互いにいい刺戟を与え合っている。世界農業遺産においても、まずこうした専門科学者との友好的な連携をもつことを期待したい。国東半島・宇佐地域農業のなになが魅力的で、どう意義があるかの情報を、常に大学等研究者たちから入手することを心がけられたい。またそれは逆に、今まで当たり前の日常風景だった地元の方々の生活へも刺戟を与えるものである。そしてそれらを地元の方々がみずから来訪者たちへ説明し、次の世代へも説明を受け継ぐシステムが築かれることが理想である。

次に2点目は、資料保存と参照システムについてである。世界農業遺産が今後ますます盛んとなり、全国・世界から国東半島・宇佐地域へ注目が集まった際、その問い合わせ窓口とリファレンスに関する問題ともいえる。エコミュージアムにおいては、こうしたリファレンス機能は当初より十分に想定されていなかったため、せつかくの活動も記録されず、地元住民でさえ数年後には詳細不明ということが多々あった。本稿の内容との関連でいえば、小課題 1-1 で記した民俗誌の一部だけでも、今回この調査が行なわれなければこの世から永久に消滅していただろう。後世の人々が資料を閲覧しようとしても、それは永久に出てこないということである。また、先にウォーキングの有効性を実証するために資料の保存が大切と述べたのもこの部分にあたる。この点は多くのジオパークでも世界農業遺産でも未だ不十分な項目であり、地元図書館などと連携した取り組みが求められる。世界農業遺産サイトは、できる限り後世へ引用可能な情報を残す努力が必要であり、20年もすればその膨大なデータベースは消滅させるには忍びないものとなって、エコミュージアムのように自然消滅することはないだろう。

3点目は、運営費用についてである。現在、世界農業遺産における案内ガイドの多くは、現役を退いた退職組の皆さんによる好意的なボランティア活動により成り立つケースがほとんどである。残念ながらこのことは逆に、この仕事では家族を養う若者は就業できないことを表している。難しいことは承知であるが、このためにエコミュージアムが消滅した事例は枚挙にいとまがない。ジオパークでは現在、地域起こし協力隊制度や各種臨時雇用促進助成金などを活用して若者をジオパーク事務局へ雇用する事例がみられる。そのこと自体の是非はここでは検討しないが、いずれにせよ世界農業遺産を活動として持続可能なものにしていくためには、専門従事者の設置は不可欠である。

4点目は、他地域とのつながりについてである。エコミュージアムもジオパークも世界農業遺産も、みずからの地域を住民自身が見直し、その良さを再発見し、次世代へつなげていくた

めの試みといえるが、あまりにやりすぎると、今度は地域のことしかみえなくなる懸念も生まれる。エコミュージアムにおいては、全国的な展開力が弱まったことや、そもそもフランス生まれの思想が世界的なネットワークを持たなかったことで、活動メンバーがいつも変わらず、いつのまにか活動が停滞してしまった事例が少なくない。ジオパークにおいては、当初は欧州と中国の地球科学者たちのみの連携であったが、ユネスコが管轄するようになったことで、ジオパークの地域に住む者は世界中に同じ仲間を持つことになった。たとえば2012年に長崎県島原市で開かれたユネスコ国際会議では世界中からジオパーク関係者たちが島原へ集まり、懇親会では同じジオパークに生きる住民同士として、共に悩みを相談したり喜びを分かち合ったりする光景がみられた。こうした喜びはもちろんジオパークの一員となれたことで新たに島原の人々へ与えられた人生の楽しい刺戟である。会議後も人々はフェイスブックで互いに友人となり、今度は海外での会議へも参加して再会を喜ぶという新しい動きも出ている。世界農業遺産においても、当然FAOに協力しながら世界とのつながりを深めていくことが、活動を末永く持続してゆく一つの原動力となるだろう。

最後に5点目は、そもそも世界農業遺産を通して何がやりたいのかという哲学と倫理についてである。もう少し具体的に言えば、今後地域が進んで行く際に出てくる諸課題に対して、どう判断していけばよいのかという問題である。たとえば熊本県阿蘇地域においては、草原生態系の保持が難しくなっていることが最大の環境問題となっており、そのためのさまざまな対処法も議論されているが、それでも何故そもそも草原生態系を保持しなければならないのかという地元への批判も実在するのである。阿蘇の人々は、山野の森林化を防ぐために毎春山に火を入れる野焼きを行なっている。これは別府や湯布院でもみられることであり、北九州市の平尾台や山口県秋吉台の美祢ジオパーク、静岡県伊豆半島ジオパークの大室山など全国広くでみられる文化だが、火を入れることで大量の二酸化炭素を放出することが地球温暖化へ寄与する悪行であるとの批判が寄せられる。そこまで攻撃的でなくても、たとえば草原よりも森林のほうが生物多様性や地下水涵養にも良いのではないですかという他市民からの素朴な疑問が寄せられる。エコミュージアムもジオパークも世界農業遺産も、こうした他地域からの疑問に、たとえ正答が分からないとしても、何かしら答えねばならないのである。もしそれに対する回答を自分たちが有していなければ、自分たちの活動自体もどちらの方向を向けば良いのか分からず、一歩も動けなくなる。国東半島・宇佐地域で具体的な事例をあげれば、オオイタサンショウウオやイワギリソウなどがいつも紹介されるが、こうしたレッドデータブックに掲載されている希少種について「どこにいけば会えますか」という他市民からの素朴な問い合わせに対して何と答えれば良いのか、その議論は地元住民の間でしておく必要はある。自然を伝えようとするウォーキングイベントにより、かえって自然が破壊されるジレンマは深刻な課題である。他地域から不特定多数の来訪者たちを受け入れようとする世界農業遺産も、こうした倫理的責任から逃れることはできないし、そこが芯としてしっかり立たねば、エコミュージアムのように活動もいつしか停滞してしまうのである。

以上、かつてわが国において一世を風靡したエコミュージアムの衰退を通し、「新しいアピー

ルポイント」がどう新しくなくなってしまうのかについて、5点注意点を述べた。国東半島・宇佐地域世界農業遺産において、新しいアピールポイントはこれからも生まれてゆくであろうが、問題はむしろそれをどう持続可能にできるかであり、そちらのほうが現実には難しい課題なのである。なお、こうした類似制度に如何なるものがあるのかについては、同じく日本地理学会から出された論文、梶原宏之「類似制度との比較からみたジオパークと地理学の役割」E-journal GEO、9-1、pp.61～72、2014年4月を参照されたい。

(3) コースの整備について

「ストーリーがきちんとできあがってシステムとして完成させていけば、成果となる。ハード面をどうやっていけば良いか、ストーリーも組み立てて、コースもきちんと整備しているということになれば、ロングトレイルは1つの観光資源面からも完成したものになる」

上記要望・意見に対しては、(2)のソフト面に対するハード面の問題として、2点回答申し上げたい。

1点目は、フットパスに対する考え方と文化についてである。フットパスそのもののハード整備は、予算をかけさえすればある程度整備できるものと思われる。フットパスの本場であるイギリスにおいては、ある程度共通した設備やシステムがどこのフットパスでもみられるため、訪問者は迷うことなくそれらを利用することができる。しかしそうなるまでには、イギリスですでに長い年月の積み重ねがある。また、他人の土地へ入るといことはどういうことか、歴史的な国民の認識や議論の文化がある。この点について、詳しくは小課題2で考察されるが、イギリスを真似てハード面だけを整備しても混乱することも予想されるため、注意が必要である。

2点目は、前項でも4点目にあげた課題と関連して、他地域とのつながりを意識したハード面の整備について最後に述べたい。エコミュージアム、世界ジオパーク、世界農業遺産、世界遺産、世界記憶遺産、ユネスコ無形文化遺産、ユネスコエコパーク、ウォーキング、さるく、九州オルレなど、似たような活動が増えてくるにつれ、来訪者たちも次第に混乱するのは仕方ないことである。しかしこれらを、地域資源を回りながら地域散策を楽しむ試みととらえれば、すべて共通したイベントとみることもできる。とすれば、世界農業遺産だけを懸命に喧伝せずとも、横に連携していだけで途端に巨大な市場が広がることになる。大分県はすでにこれらのうち多くの実績をもっているため、それらを連携整備させた形を「大分スタイル」としていち早く提示することもできるだろう。

*注1. 国東半島・宇佐地域のように、世界遺産・世界ジオパーク・世界農業遺産の取り組みをどれも持つ地域としては他に、熊本県阿蘇地域や新潟県佐渡島があげられる。東アジアでは韓国の済州島が先進事例である。

*注2. さるくイベントとしては長崎さるく(2006年開始)が有名だが、しかし筆者の調べでは別府八湯ウォーク(1999年開始)や同じく別府の温泉博覧会オンパク(2001年開始)、前掲の阿蘇をさるく会(2002年開始)などのほうが古く、この手のイベントを仕掛けるには大分県が

先導的な役割を果たせるものと思われる。

また九州の各県においては、自らの県への入込観光客数を増やすことには懸命だが、他地域とのつながりを意識したものは多くみられない。国東半島・宇佐地域においては、かつてからの歴史的なつながりがある愛媛県との連携イベントはみられるが、ここで指摘したいのはそうしたシンプルな連携イベントではなく、来訪客たちの導線をおさえたいということである。つまり、国東半島・宇佐地域へ来る人々は、どこから来て、どこへ行くのかということである。どんな訪問客も、現地へいきなり現れて、いきなり消えるわけではない。現地へ来る前に必ずどこかを通して来て、そしてまたどこか別の場所へ流れてゆく。従来はそれら他地域は強力なライバルに見えたかもしれないが、これからは提携すべきパートナーと考えねばならない。国東半島・宇佐地域へ来た人が、その前に A 地を訪れ、そしてこれから B 地を訪れるならば、それら導線の上で国東半島・宇佐地域が何を提供できるのか、競合ではなく役割分担を考えたい。A 地でこれがみられ、国東半島・宇佐地域でこれがみられ、B 地でこれがみられるという流れにおいて、総合してこういうテーマが立てられますよという旅のスタイルを提案することができる。そもそも遠方から九州旅行へ来る人々は、北海道や沖縄のように 1 ヶ所だけで帰る人はほとんどいない。せつかく九州まで来たのだから、少なくとも 2~3 ヶ所は周りたいと考える人がほとんどである。となると、九州各地はそうした連携先の情報も上手に出すことでスムーズな流れを構築することが望ましいだろう。九州には現在、国東半島・宇佐地域・阿蘇地域・高千穂郷椎葉山地域と 3 つの世界農業遺産サイトが並んだ。もし世界農業遺産に関心のある外国人旅行者が日本を訪れたならば、これら 3 ヶ所には必ずどれも行きたいはずである。そのための情報を我々がどう発信できるか、より一層の連携とハード面の整備がこれから問われるだろう。

農業遺産ロングトレイルを通
じた農耕文化や歴史的
ストーリーの掘り起こしとそ
の多面的価値の評価研究

平成 29 年 3 月 27 日 発行

編 集 野村久子

発行者 野村久子

住 所 〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1 九州大学 農
学研究院 国際農業教育・研究推進センター

電 話 092-642-4348

印刷所 石川特殊特急製本株式会社